

識者が語る日本の文化と家――

和の 住まいの すすめ

和の住まい推進関係省庁連絡会議

和の住まいを見直し、 こころ豊かな暮らしを

都市化が進み、日本人の生活習慣が変化したことで、伝統的な和風住宅に暮らす人の数は以前にくらべて少なくなりました。しかし、現代の暮らしの中にもう一度和の住まいの要素を取り込むことで、私たち日本人が育んできた豊かな精神性と生活文化を再発見することができるのではないのでしょうか。

国土が南北に長い日本は亜熱帯に属する沖縄から、亜寒帯に属する北海道まで気候もさまざまで、植生も多様です。それを反映して、地方ごとに独自の文化を育み、伝統的な家屋のつくり方も地域ごとの特色を持っています。

しかし、日本の家屋に一貫しているのは、木や紙や土などの自然素材をうまく利用し、自然に寄り添い、人にやさしい住まいであることです。例えば、土の壁や畳は空気中の水分を吸収・放出して部屋の中の湿度を一定に保つ働きがあります。

伝統的な日本家屋は日本の文化を育んできた器でもあります。日本人は季節の移ろいを敏感に感じ取って心を寄せ、和歌や絵画、工芸などに表現し、茶道や華道などの美しい所作に昇華してきました。自然に向かって開かれた日本家屋のつくりが日本人の精神性に大きな影響を与えてきたことは間違いありません。

この小冊子が和の住まいを見直していただくきっかけとなれば幸いです。

和の住まいのすすめ

発行 和の住まい推進関係省庁連絡会議
平成25年10月
印刷 加藤文明社

「識者が語る日本の文化と家」編
編集 日経BP社
ライター 介川亜紀、中川寛子、村島正彦
写真 だじ/amanaimages、岩舟雄一、浦川祐史、
太田実来子、桑田和志、城山勇治、
studio track、寺尾豊、林 安直、
宮田昌彦、諸石 信、
撮影協力 三溪園

和の住まい推進関係省庁連絡会議は、日本の住まいや住文化の普及に取り組むことを目的として設立されました。

文化庁 農林水産省 林野庁
経済産業省 国土交通省 観光庁

【和を楽しむ】

- 2 古くなって味わいを増す 僕たちも、そんな家具づくりをしたい
本山 広真さん 本山 瑞沙さん
- 5 海外で気づいた 日本のよさを伝えよう 築70年の古民家で和を発信
奥谷 舞子さん 池田 めぐみさん

【和を再発見する】

- 8 100年後に「和の暮らし」を伝えたい
セーラ・マリ・カミングスさん
- 16 埋もれている、各地域の「和」が面白い
星野 佳路さん
- 22 和の住まいは、「暮らしの文化」の継承
梶浦 秀樹さん

【和の知恵を生かす】

- 10 畳の文化、和の文化を子どもたちに伝えてほしい
増田 勇さん
- 11 肌に直接触れるものだから 安心できるい草を
加来 誠一さん
- 11 畳には、色、香り、感触の三つのリラックス効果が
森田 洋さん
- 12 襖、障子が育む日本人の意識、生活
池田 修治さん
- 13 障子一つで、和の演出と室内環境の改善を実現
太田 明さん
- 14 瓦が生み出す日本の美しい風景
野口 安廣さん
- 15 古代から日本人の暮らしには竹があった
渡邊 政俊さん

【和の文化を伝える】

- 18 住まいに手を入れながら 暮らす喜びを取り戻す
斎藤 英俊さん
- 19 素を大事にする文化が 世界の「ジャパン＝漆」を生んだ
丸山 高志さん
- 20 時間をかけてつくり上げる日本の家
西澤 政男さん

【和の心を育む】

- 24 廊下の片隅にスツールを置き 床の間代わりに花を飾る
池坊 由紀さん
- 25 子供の記憶に一生残る着物姿を
堀井 みち子さん
- 26 伝統的な日本の家は 高い精神性を備えている
重川 隆廣さん
- 28 仏壇を前に三世代一座、家族がつながる
小堀 賢一さん
- 29 時を刻む住まい 和を大切にする住まい
安藤 直人さん



佐賀県江北町上小田地区に、本山夫妻の住まいでギャラリーショップのbookMt.はある。家具の製作工房は、広真さんの実家、かつて農業用の小屋を改修して使っている

古くなって味わいを増す 僕たちも、そんな家具づくりをしたい

本山 広真さん

本山 瑞沙さん

「日本の家は、畳や土壁や木だったり自然素材でつくられていますよね。古くなって、味わいが増します。僕たちは、この家のように、大切に長く使われるような本物の家具をつくるのが理想なんです」

この古家を買ってリノベーションして暮らす本山広真さん（36歳）と瑞沙さん（37歳）は、ともに家具デザイナー。夫の広真さんは、家具の製作も手掛け、bookMt.（ブックマウンテン）という二人だけのギャラリーショップを構えている。この家は、二人の住まいであるとともに、週末を中心に彼らのつくった家具のギャラリーショップとして利用しているという。

二人は、このbookMt.のある佐賀県江北町の隣町、白石町の出身で

高校の同級生という間柄だ。大学卒業後に、時期の違いはあるものの、長野県にある県立の職業訓練校で家具づくりについて学んだ。

その後、それぞれ家具会社など社会に出て経験を積んだ。そして、郷里に戻って、二人でアトリエを構えることを決意したのだと言う。

築74年の古家を自ら改修

「結婚することになって、家探しを始めたんです。古くてもよくて、自分たちで手を入れてよいところ。安く借りられる、という条件で探していたんです。最初は買うことは考えていませんでした」と瑞沙さん。そして、たまたま見つけたのがこの家だった。



玄関を入ると洋間が設けられている。かつて江北町は、炭鉱町として栄えていた。その時代には、若い医者がこの部屋を間借りして、診療所として利用したこともあった。改修前は、元の家主の寝室として使われていたが、合板の壁に白いペンキを塗ったことで明るくモダンな部屋に生まれ変わった



太平洋戦争の開戦前、横浜からわざわざ職人を連れてきてつくった家。土壁で設えられた玄関周りの装飾や、廊下の丸窓の指物などに都会的センスがうかがえる



屋根瓦の補修やシロアリに喰われた床下など、どうしてもプロの手を借りなければならぬ箇所以外は、プロの助言や指導を得ながら自分たちの手で改修した。改修にかけた費用はトータルで100万円に満たない

手間は
惜しまない



本山夫妻がつくる無垢の木をつかった家具が、和室とどう調和するか見て、感じてもらえることも、このギャラリーショップの重要な役割だ

1939年（昭和14年）に建てられた築74年の平屋だ。横浜で鉄の貿易で財をなした地元出身者が、横浜から職人を連れてきて両親のためにつくったのが、この家なのだという。玄関を入ると、すぐに洋間があって、その奥に和風の空間が控えている。玄関や洋間まわりのしつらえが、昭和初期のモダンな空気を今に伝える。

4〜5年は空き家になっており、この地を離れた家主の子息が売りに出していた。「取り壊して更地にするにもお金がかかる。思い出深いこの家を使ってくれるのなら」と、破格の値段で譲り受けたのが2010年の夏。それから、地元の大工・左官職人・空き家再生を行うNPOなどの協力を得ながら、約10カ月かけ



玄関脇の窓も建てられた時代を感じさせる。一輪の花が来客をもてなす

て自分たちの手で改修した。

地域の人々にも愛されながら

二人が結婚して、bookML.をオープンしたのは2011年7月だ。この家に移り住んで2年ほどが経っていた。

「夏は暑くて冬は寒いですよ。でも、それ以上に四季を感じられるこの暮らしが楽しい」と広真さん。「先日地域のお祭りがあって、以前の家主の親戚たちが見に来て懐かしんでくださった。そんなこともささやかな喜びです」と瑞沙さん。

若い感性で甦ったこの住宅は、ここに暮らす本山さんたちにはもちろん、訪れる人たちに愛されながら、さらに時を刻んでいくのだろう。



昔の家には広いウッドデッキや庭もあり、木の下にはハンモックがゆらゆら。奥谷さんの夫、智さん、長女の凜々子ちゃんもこの場所がお気に入り

海外で気づいた 日本のよさを伝えようと 築70年の古民家で和を発信

奥谷舞子さん

池田めぐみさん

神奈川県鎌倉市で築70年の古民家「蕾の家」を舞台に、日本のよさを発信する各種教室、イベントなどを主宰する奥谷舞子さん（28歳）。日本に目を向けるようになったきっかけは、大学の卒業旅行だった。

「スペイン・バルセロナで、その地域ならではの生活を経験したので、その時、自分の日常を振り返り『私は自分の国の暮らし、文化をちゃんと知っているだろうか』と思ったのです。都心でマンションに暮らし、日本らしいものを感じることのない毎日。日本人としてそれではないのか、と」

その時、一緒に旅行していたの

が、現在「蕾の家」をともに経営している池田めぐみさん（28歳）と池田さんの妹。3人は旅行の間中、帰国後は日本のよいものを取り入れた暮らしを海外も含め、多くの人たちに伝えるような事業をしたいねと話し合っていたと言う。

帰国後、大学院に進んだ奥谷さんは環境工学を学ぶ中で、古民家がいかに自然を上手に無駄なく利用しているかを知った。

「池田さんの出身が鎌倉で、年々古い家が減っていくのをもったいないと思っていましたし、始めるなら古民家だと。鎌倉に場所を絞って賃貸物件を探す中で出会ったのが、この

壁に珪藻土を塗る作業は自分たちで行った。サッシを黒く塗るなど、自分たちでできる作業は自分たちの手で、がモットー

自然素材が面白いのは、
見ていて質感を感じるということ。
優しさ、強さ、温かさ……。
それが工業製品にない魅力だろうと思います。



1



2



3



4

1 広い庭だけに草刈りは大家さんの手を借りても一仕事。「サウナに行かなくても汗がかけます」と池田さん。2 古い梁の上にはカードを飾るなど、いかにも和風というスタイルではないのに、和を感じる不思議な場所。3 大学の同級生という奥谷さん（右）と池田さん（左）。4 広いウッドデッキ、庭で伸び伸び育つ漂々子ちゃん。奥谷さんと一緒に毎日ここに通う

建物でした」

当時は前居住者によってごく普通の内装が施されていたそうだが、たまたま知り合った古民家再生協会の仲介で解体される築100年の古民家から建具類を譲り受け、入れ替えた。建具類の交換に加え、土壁には珪藻土を塗り重ねるなどのリフォームを行い、現在の姿に。卒業旅行から4年目のことである。

五感が磨かれる古民家暮らし

現在、蕾の家は昼間、各種教室、国際交流その他のイベントに利用されており、子どもから高齢者まで幅広い年代が集まる。

「不思議なのはどの年代、国籍の人にもこの家はなんだか、温かい、ほつとすると言われること。70年というこの家の歴史を考えると人間の年の差なんて、たいしたことないということなんでしょうね」

夜は池田さん姉妹が居住。古民家暮らしのよさと大変さを実感している。「冬はとても寒くて辛いし、トタン屋根を打つ雨の音はすさまじくて、このまま家が流れてしまうんじ

やないかと思うほど。でも、だから、逆に日差しが一日一日暖かくなっていくのがうれしくてたまらないし、雨に濡れた木々の輝きがなんとも言えず、美しく感じるのです」と池田さん。

現代の世の中は何事も効率が優先される。その観点からすると古民家は非効率的で無駄が多い。しかし、それに真剣に立ち向かうと、五感が研ぎ澄まされ、全身で自然を感じるようになる。

池田さんは「古民家に住んでみて分かったのですが、人間は便利過ぎると退化してしまう。ここに住むと手間がかかるから、体を動かす。汗をかく。おかげで引越してきてからは体調もよく、風邪もひかなくなりました」と言う。

蕾の家に通ってくる人たちの中には古民家のよさに触れ、自らも古民家に住もうと家探しを始めた人たちもいる。

「住めば住むほど愛着が湧き、よくなってくる。それが古民家の魅力。どうせ暮らすならそんな家のほうがいいですよ」と二人は声を揃える。

100年後に「和の暮らし」を伝えたい

セーラ・マリ・カミングスさん



日本は、極端から極端に走りすぎているのかもしれない。

古くから続く日本の文化も大切にしながら、
新しい技術と溶け合わせる事が大切では。

profile

セーラ・マリ・カミングス

1968年、アメリカ・ペンシルベニア州生まれ。1994年、小布施堂に入社。欧米人で初の利酒師に認定される。ウーマン・オブ・ザ・イヤー2002大賞受賞（「日経ウーマン」日経BP）。長野県小布施町の町おこしの立役者として知られる。現在、文化事業部代表取締役。



「地に足の着いた生活」は、
アスファルトではなく土と触れることから

今の日本人は、古くから受け継がれてきた日本の家は寒いし不便だと見捨てて、新しい住宅やマンションを好みます。本当にそれでよいのでしょうか？時代に合わせて変化することは必要だけれど、何が本当に大事なのかを見極めなければ。

日本の家の一番よいところは、襖を開けたり閉めたりすることで部屋が広くなったり、狭くなったり、フレキシブルな使い方ができることだと思います。個人的には家の外と内をつなぐ縁側が大好きです。

風景のことを考えても、今の日本のあり方はどうなのかな。個人の家のについても、外側はみんなのモノ、

内側は個人のモノ」という考えが本来日本にはあったはず。家は、みんなが共有する風景の一部でもあるからです。

ところが、日本では、いま日々新しい家や建物が建てられ風景が変わっていきます。それが残念でなりません。発展することも大切ですが、古いものも残しつつ、どうやって新しいテクノロジーと組み合わせることができのか考える時期でしょう。

みんなの「かの山」をめざして

長く暮らした小布施を出ることに
なり、つぎの生活の場として見つけ

たのが、私が「かの山」と名付けたこの集落です。唱歌「故郷（ふるさと）」の歌詞にある「うさぎ追いかの山」にある「かの山」です。

ここには昔ながらの懐かしい雰囲気を残したい。そうすることでみんながいちばん帰りたい「かの山」になるんじゃないかな。この家は間もなく100年を迎えます。さらに100年使える家にしたい。自分がいちばん素敵だと思うものを100年先の将来に届けてあげられるからです。

造園学者の進士五十八さんに日本語の「家庭」というのは「家」と「庭」と書くとききました。庭のな

い家は家庭じゃないんですって。コンクリートやアスファルトに囲まれた生活は便利かもしれないけれど、本当の生活じゃない気がします。

「地に足の着いた」と言うときの地は、アスファルトではなく土のことでしょう。今、4歳になる子どもは庭の小池での泥んこ遊びが大好きです。おたまじゃくしもたくさんいます。着替えは10枚あっても足りません。

夏の終わりの季節に縁側を開けていると、トンボが飛んで入ってきます。部屋のなかを巡って、また出て行きます。ここでは本当に自然を感じられて幸せです。

畳のクッション性は、足の裏に適度な刺激があつてよいと言われている。また良質ない草で織られた畳表は、3〜4年経ったときに「琥珀色」に変わってくる。質の悪いものは、黒ずんだりムラが出てきたりする

いぐさ
・畳



畳

畳の文化、和の文化を 子どもたちに伝えてほしい



増田 勇さん

ますだ・いさむ

1943年、鹿児島県生まれ。全日本畳事業協同組合理事長。畳店で修行を積み1967年独立。鹿児島県畳工業組合理事長など歴任。鹿児島市職業訓練協会理事。有限会社増田畳店代表取締役。

現在では、和室のない家がつくられるようになりました。たとえば一棟20戸、30戸のマンションで和室が一つもつくられない、なんていうことはザラです。急速に畳や、和の住まいの文化がなおざりにされていくのは残念でなりません。

私は、和の住まいのよさは「気取らない住まい」ということだと思います。家というのは、くつろいで家族が団らんするところです。

小さな子ども育てるうえで、畳の生活はよいものです。そのまま寝かせられますし、子どもに食事を食べさせていてご飯粒を落としても、畳の上だったらお母さんは拾って食べますよね。清潔だからです。大人も気軽に寝転がることができます。フローリングの床だとそうはいきません。これは、誰が教えたわけではありません。日本人のDNAの中に流れている基本的なことです。

畳に座るということは、目線の高さが椅子に座るより約40cm低いです。床の間のしつらえにしても、庭にしても、畳に正座やあぐらで座ったときがいちばん美しく見えるのです。

昨今でも、広さの感覚については畳が基準です。たとえば「8畳のダイニング」などという言い方をしますよね。それほど、畳は日本人の身体感覚に馴染んだもののなのです。洋室に置き畳でもいい。子どもたちに畳の文化、和の文化を伝えていってほしいと切に願います。

いぐさ

肌に直接触れるものだから 安心できるい草を

畳表（たたみおもて）の原料は、い草です。国内では、熊本県八代市でその生産の約9割を担っています。

八代市におけるい草の歴史は古く、約500年前に岩崎主馬守忠久公が、い草を植えさせたのが始まりと言われています。い草の生育に向いている湿地で、塩分の多い干拓地が選ばれました。稲が凶作で飢饉になった年にも、い草農家は暮らして困らなかったということもあり、その後この地で生産が活発になったそうです。忠久公を祭った岩崎神社では、今でも毎年、春と秋にお祭りが奉納されています。

残念なことに、近年は、中国産のい草が出回っていて、国産のシェアは3割程度に過ぎません。国産のよさは、つくられる過程がはつきりしていることです。使う農薬も登録された安全基準をクリアした農薬を使っています。それから、生産、刈り取りから泥染め、乾燥、織りまでを一貫して同じ農家が行います。

ですから、農家が責任を持ってい草の栽培から畳表の織りまできちんと管理してつくっており、品質には自信を持っています。最近では、製品にQRコードを付けて生産者が分かるようにしています。肌に直接触れるものだから、少し値は張りますが、安全、安心の面からは国産を選んで使っていた方がいいですね。



加来 誠一さん

かく・せいいち

1947年、熊本県生まれ。八代地域農業協同組合代表理事組合長。農業高校卒業後、い草と米を中心とした農業経営者として活躍。1995年、八代地域農業協同組合理事・副組合長を経て、2005年より現職。

いぐさ

畳には、色、香り、感触の 三つのリラックス効果が

い草には抗菌作用もあり、足のニオイの原因となる微生物を抑えたり、水虫の原因の白癬菌の増殖も抑えてくれます。こうした衛生面を含めた機能に優れる畳は再度、見直してほしい建材です。

三つ目は、足もとへの心地よい触感です。日本の住生活では、室内では素足で生活します。足もとが接する畳の感触はクッション性があり適度な刺激となります。また、夏はひんやりと、冬は温かみを感じられます。

二つ目は香りです。い草の香り成分には、フィトンチッドという樹木から出る物質が含まれています。森林浴でよい気持ちになるのは木々のみどり色を目にし、さらにこの香りを嗅ぐことがリラックス効果として現れるからです。つまり、畳によって室内に居ながらにして、森林浴のリラックス効果が得られるのです。



森田 洋さん

もりた・ひろし

1970年、愛知県生まれ。九州大学大学院博士課程修了。国立八代高専助手を経て北九州市立大学国際環境工学部准教授。博士（農学）。著書「イグサのすべて」新芽出版、「驚くべきイグサの機能性」文陽舎など。

住宅の材料としてい草・畳を見たとき、いちばん機能的に注目されるのは吸放湿性です。梅雨などの高湿度期は大気中の水分を吸収し、反対に冬の乾燥期には水分を放出します。日本の住宅で畳を使うのは、気候風土と密接に関係している理にかなっています。

このほか、い草には三つのリラックス効果があると考えています。一つ目は色です。い草の黄みどり色というのは、人に安心感をもたらす色だと言われています。



池田 修治さん

いけだ・しゅうじ

一般社団法人日本襖振興会代表理事。伝統的な襖材料の全国的な供給地である和歌山市で襖の材料を販売。同振興会では襖に関する情報やノウハウの提供などに努めている。

襖

襖、障子が育む 日本人の意識、生活



襖は開け閉めすることで風、光、音、気配をコントロールできる。襖紙、引手などにこだわることもでき、インテリアとして考えても奥が深い

日本人には襖に代表される「引き戸」は当然り前の存在ですが、開け閉めすることで、広さを調節できるという機能は中国、欧米の方々には驚きなのです。

襖には広さの調節以外にもさまざまな機能があり、日本人の意識、生活に大きな影響を与えてきました。たとえば、襖はドアと違い、部屋を完全な個室にはしません。微かに隣室の家族の雰囲気や伝わるので、家族は互いに思いやりを持って暮らすようになります。

あるいは小説家、谷崎潤一郎が「陰翳礼讃」で書いたように「日本の美は陰翳が根源にある」という考えは、障子越しの柔らかい光が生み出したものです。また、靴を脱いで家に入る生活様式は清潔な暮らし、几帳面で礼儀正しい国民性を育んできましたし、障子、襖を張り替えて使い続ける暮らしはエコの最先端だったと言ってもよいのではないのでしょうか。

その和を手軽に現代の暮らしに取り入れるなら、リビングの一角に3〜4畳ほどの和空間をつくってみてはどうでしょう。

小上がりのように少し高くして畳を敷き、襖、障子で仕切れば趣味の部屋によし、来客時には客間、寝室にも。洗濯物を畳むのに便利という声もあり、わずかなスペースでも自在に使うことができます。



太田 明さん

おおた・あきら

全国建具組合連合会副会長。
創業 65 年の建具会社、太明
(東京都品川区) の代表取締役。

建
具障子ひとつで、和の演出と
室内環境の改善を実現

現在でも、建具職人に依頼すれば、住まい手の要望に合うデザインや機能を満たす建具をつくってもらえるという。建具に模様を組み込む組子のような高度な技法を持つ職人は、全国で2500人程度

建具とは、住宅と屋外との仕切り、部屋の仕切りなどに使われる建材を指します。戸（ドア）、窓のほか、昔ながらの和の住宅では障子、襖、欄間などが代表的ですね。こうした建具は木製建具、金属建具に二分されていますが、戦前は職人の手でつくった木製建具が主流でした。戦後になって、洋風の和室のない住宅が増えるにつれ、和室につきものの障子や襖、欄間の出番が減ってきたのでしょね。

洋風の住宅であっても、木製建具をアクセントに使うだけで、十分、和の雰囲気を楽しめます。実は、洋風のインテリアと昔ながらの木製建具はなじみがいいんですよ。特に、和のイメージを表現しやすいのは障子です。材料は、スギやヒノキ、スプルスなど、反りが少なく、香りも楽しめる木がいいですね。

障子は、室内環境の調整にも優れる建具です。窓辺に採用した場合ですと、屋外からの光のほか、寒さ、暑さを和らげたり、開け具合によって風や眺めを得ながら外部からの視線を遮ることもできます。また、大空間の一部を障子で仕切れるようにすれば冷暖房の効率アップにつながります。

リフォームの際に障子を上手に活用すれば、わずかな変更で、室内の雰囲気をはかりと変えつつ室内環境の改善をはかれるわけです。若い世代の方々にも、ぜひ活用していただきたいですね。



野口 安廣さん

のぐち・やすひろ

全国陶器瓦工業組合連合会理事
長、愛知県陶器瓦工業組合
理事長。現在、日本の3大産
地である愛知県の三州瓦メー
カーの経営者でもある。他の2
産地は石州（島根県）、淡路（兵
庫県）。

瓦

瓦が生み出す 日本の美しい風景



かつては日本全国に地元の土を使った瓦産業があり、地元で消費されていた。住宅も地産地消だったといえる

粘土瓦がわが国で屋根材として使用され始めたのは1400年以上前から。その瓦、そして壁がつくってきたのが日本の風景です。

古都と呼ばれる街や旧街道沿いの街並みなどをイメージしてみてください。墨の濃淡のように穏やかな色目の瓦、壁があり、そこに緑が加わることで、西洋にない日本の風景が生まれていることが分かります。

また、日本は四季がはっきり分かれていることから、屋根材には多くの性能が要求されます。その点で、瓦は他の屋根材に比べ、耐久性・断熱性・遮音性など多くの優れた性能を持っています。適切に施工されていれば、数十年はおろか100年持たせることもできるほどです。

阪神淡路大震災以来、瓦は重いから地震に弱いとの誤解や風評がありますが、実際には震度7クラスの地震にも耐え、大型台風下でも、国が決めた基準風速に飛ばされない防災に強い瓦や施工方法が開発され普及しています。耐風性能、耐震性能は他の屋根材以上なのです。

住宅建設時には他の屋根材にくらべ、割高との意見がありますが、建設後、塗装の塗り替えや葺き替えなどが不要で、トータルで見れば割安です。

特に、太陽光発電装置を載せるつもりなら、長期的にメンテナンス不要の瓦屋根がおすす。住まい全体の風格が上がることも請け合いです。



渡邊 政俊さん

わたなべ・まさとし

全日本竹産業連合会事務局長。
京都大学で長年竹の栽培を研
究。海外での技術指導にも携
わってきた。竹文化振興協会
専門員、京都市洛西竹林公園
専門員も務める。

竹

古代から 日本人の暮らしには竹があった



竹垣や袖垣はまさに和の表現。日本人の心の表現だ（写真は重要文化財 京都大学清風荘。撮影は渡邊政俊氏）

日本最古の小説が竹から生まれたお姫様の物語「竹取物語」であることから分かるように、竹は古代から日本人の暮らしとともにありました。

今見られる日本最古の竹製品は縄文時代晩期の地層から発掘された籃胎漆器ですから、古代の人は竹をいろいろな使っていたようです。

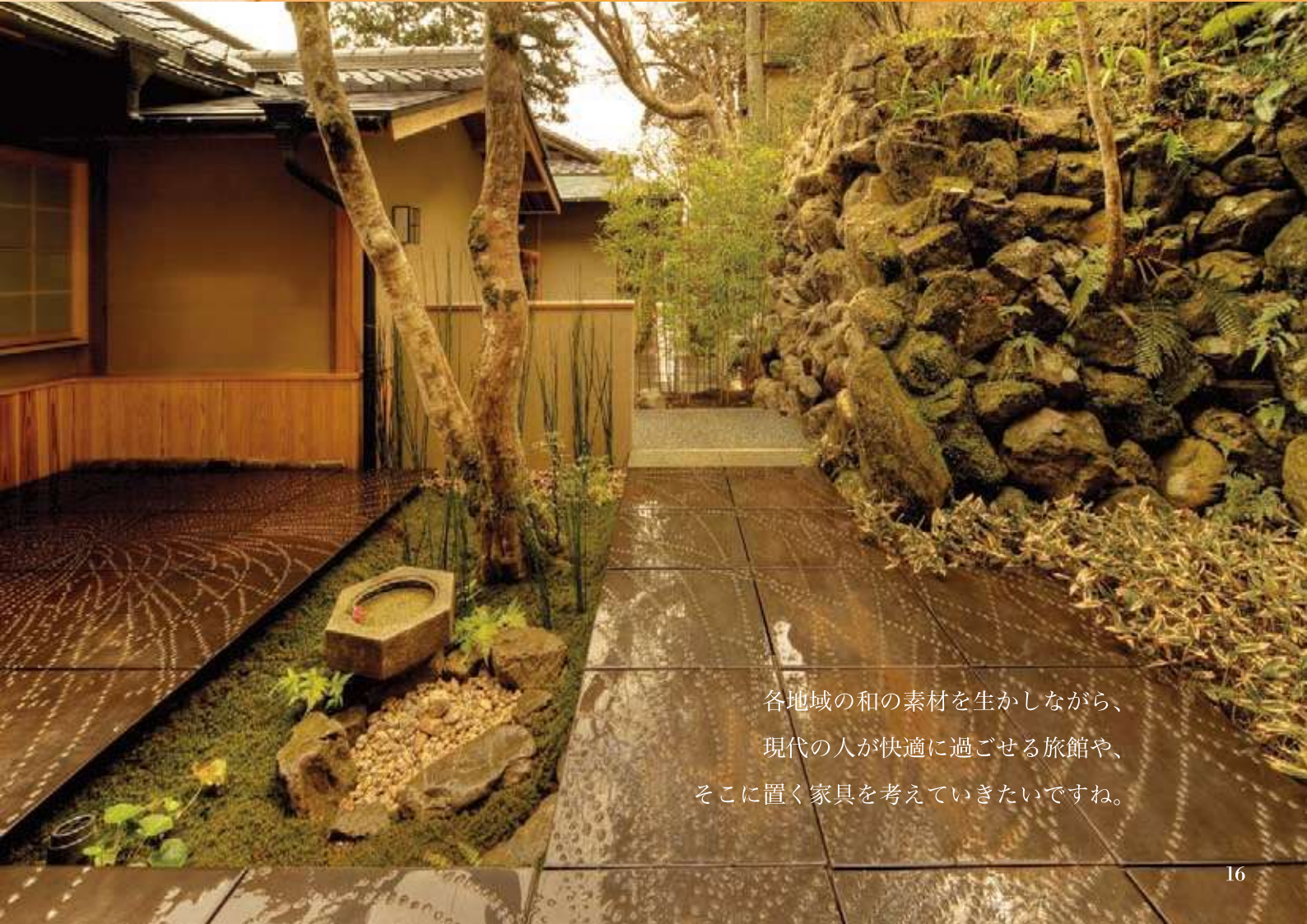
竹の空洞に霊力や呪力が宿るものと信じ、それが今日も続く、青竹を建てて工事の安全を祈る地鎮祭や、お正月のどんど焼き（左義長）、七夕など日本各地に伝わる竹を主役とした神事や祭礼につながっています。

竹の美に惹かれ、新たな文化を生み出したのが、戦国時代に登場した茶人たちでした。竹をさまざまな道具として使い、丸い竹や割った竹で天井や腰板を張ったり、各種文様にも見えるような竹垣を編むなど、この時代にはこれまでにない利用法が生まれました。お茶席に欠かせない花器にも竹が多く使われるようになりました。

このような歴史が示すように、一点の竹製品だけでなく、その場を和の空間にする力があります。室内なら、おすすめは照明器具。竹を編んだペンダントライト、フロアスタンドには和モダンな商品も多く、洋室にも合います。気軽に取り入れるなら、竹の花器を使う手も。いつもとは違う、しっとりした風情が楽しめますよ。

埋もれている、各地域の和が面白い

星野 佳路さん



各地域の和の素材を生かしながら、
現代の人が快適に過ごせる旅館や、
そこに置く家具を考えていきたいですね。

profile

星野 佳路 (ほしの よしはる)

1960年、長野県生まれ。星野リゾート代表取締役。慶應義塾大学経済学部卒業後、86年に米・コーネル大学ホテル経営大学院にて経営学修士号を取得。91年、星野リゾートの前身である星野温泉の社長に就任。「星のや」をはじめ各地のリゾート施設、温泉旅館を運営。



心を込めた客室のしつらえが
和とおもてなしを表します

和は画一的なものではなく、日本の各地域が独自に持っているものだと思います。私たちが日本各地に宿泊施設やリゾート施設をつくる際には、意識してその地域独特の素材を使いますが、それは和を取り入れているといえるでしょう。地元の方々は気付きにくいのですが、他の地域に住む日本人や外国人が魅力を感じる素材は、各地域で必ず見つかります。そのため、全8ブランド、約30カ所の当社の施設は、それぞれ異なる個性を持っています。

例を挙げますと、「星のや京都」には京都という場所柄を鑑み典型的な和と京文化を、沖縄の「星のや竹

富島」は琉球文化を、青森の「青森屋」には津軽三味線やねぶた囃子といった現地の文化を、建物の外観や庭、室内のしつらえ、アクティビティーに反映しています。

一方、そういった文化を建物や内装に反映するのと並行して、現代に見合う機能性を取り入れ、ゲストの皆様が快適に滞在できるようにすることも重要だと思います。どこから見ても和だけだと従来と比べて非常に快適、とゲストに感じていただけるような。地域によっては建物の断熱性を高めて適度な室温を保つほか、特に「寝る」「座る」「くつろぐ」場所については不便を感じないように改



良を図っています。

たとえば、「星のや京都」で使用しているオリジナルの畳ソファ。畳の部屋に外国製のソファなどがあると違和感がありますよね。そこで、私たちとデザイナーがコラボレーションして、畳に合うソファを新たに開発したのです。和室に溶け込むように背もたれの外側には竹を使用。和室にあっても違和感がなく、なおかつ長時間座っていても快適な座面の高さや素材を追求しました。

四季のしつらえで和を表現

和の趣を持つ宿泊施設の特徴とし

て忘れてはならないのが、「四季」

です。西洋のホテルの場合、年間を通じて同様に客室をきれいにするという意味合いのハウスキーピングを粛々と行います。それに対し、日本で部屋を整えることは「しつらえる」と言う。しつらえるには、掛け軸や生け花などをはじめ、すべてに四季の魅力をいかに表現するかが大切です。日本ならではの旅館のスタッフは季節やゲストの気持ちを慮りながら、毎日違うしつらえを考え形にしています。こうして心づくしに整えた部屋は和の趣とともに、日本ならではの「おもてなし」の気持ちも伝えてくれるに違いありません。



斎藤 英俊さん

さいとう・ひでとし

1946年鹿児島県生まれ。東京工業大学建築学科卒、同大学院博士課程修了。工学博士。一級建築士。文化庁主任文化財調査官、東京芸術大学大学院教授などを経て京都女子大学教授。建築史、文化財保存学。

伝統
建築

住まいに手を入れながら
暮らす喜びを取り戻す



若い人たちは「和の住まい」に関心を持ち始めている。古い街並みや、今に残る民家を安易に取り壊さずに、受け継いでいくことも大切。ちょっとした再生で住みこなしている人の体験を知ること役立つ

現代の住宅は新築、完成したときが最もよいとされます。ツルピカの建材で建てられた住宅は、あとは劣化し価値が落ちるだけです。一方、イギリスなど欧州の国々では、古い住宅に住まいを手を入れながら価値を高めていくのが普通なので対照的です。

元来、日本の住宅は、木材や土壁、瓦などを使ってつくられてきました。これらの自然素材は、年月を重ねるほど味わいや深みを増していくものです。たとえば、古い料亭の格子戸は、毎日磨き上げているからすり減っています。拭かないとボソボソと古び、拭いて磨いたときのすり減り方とは全然違います。毎日拭いていると木の目が硬く詰まって、結局、持ちがよいのだそうです。

現代では、住宅には手を掛けたくないという消費者の要望を汲んで、ハウスメーカーなど住宅の供給側からはどんどんメンテナンスフリーのものが提供されています。

たとえば床材、表面加工をしていない無垢の木を使ったフローリングについても、ワックスを塗れば汚れは避けられるし、さほど手はかかりません。一般的な工業製品とは、感触や質感がまったく違います。いくらか手間がかかるかもしれないですが、住まいを手入れして暮らすのは、そこから得られる自身の体験や子どもたちへの教育の面からも、見直されてよいのではないのでしょうか。



丸山 高志さん

まるやま・たかし

社団法人日本漆工協会専務理事。国内のみならず、台湾で漆芸を指導した経験を持ち、海外の漆事情にも詳しい。自身も工芸作家であり、作品も多数。

漆

素を大事にする文化が
世界の「ジャパン＝漆」を生んだ



古代には祭祀の用具を彩るものとして使われた漆。祈りをモチーフとした現代の作品、丸山高志さんの2002年日展出展作品「霊峰賛歌 錦秋への祈り」。絵画のように壁面を飾る大作

世界中に米を食べる民族は少なくありません。しかし、白米そのままをシンプルにいただくのは日本だけです。白いご飯が艶やかな漆器に盛られたときの美しさ、そこに日本の文化の特徴が表れています。

日本の文化は淡白を愛する素の文化。木、紙、土、藁といった自然素材を使い、しかも、そこに塗料を塗るのではなく、そのままの色合いを大事にします。

その淡白な色合いの中に、ぼつと咲くような華やぎと潤いを与えるのが漆。漆は、漆の木の樹液を使った塗り物で、素材はやはり自然のものです。しかも、東南アジア全域で産出はされるものの、質は日本産が最上。世界で「ジャパン」と呼ばれ、珍重される日本の漆製品は素材のよさが生み出したものなのです。

石器時代以降に利用されてきた漆製品が一般化したのは江戸時代になってから。食器としての利用のほか、漆の丈夫さ、高い耐水性、抗菌性などが木材などを長持ちさせるため住宅にも塗布されていました。

メンテナンスしながら、何代も使い続けられる品でもあり、「もったいない」が見直される今にふさわしいでしょう。そのよさを伝え、さらに新しいデザイン、用途を提案することで、漆のある日常を復活させたいと考えています。



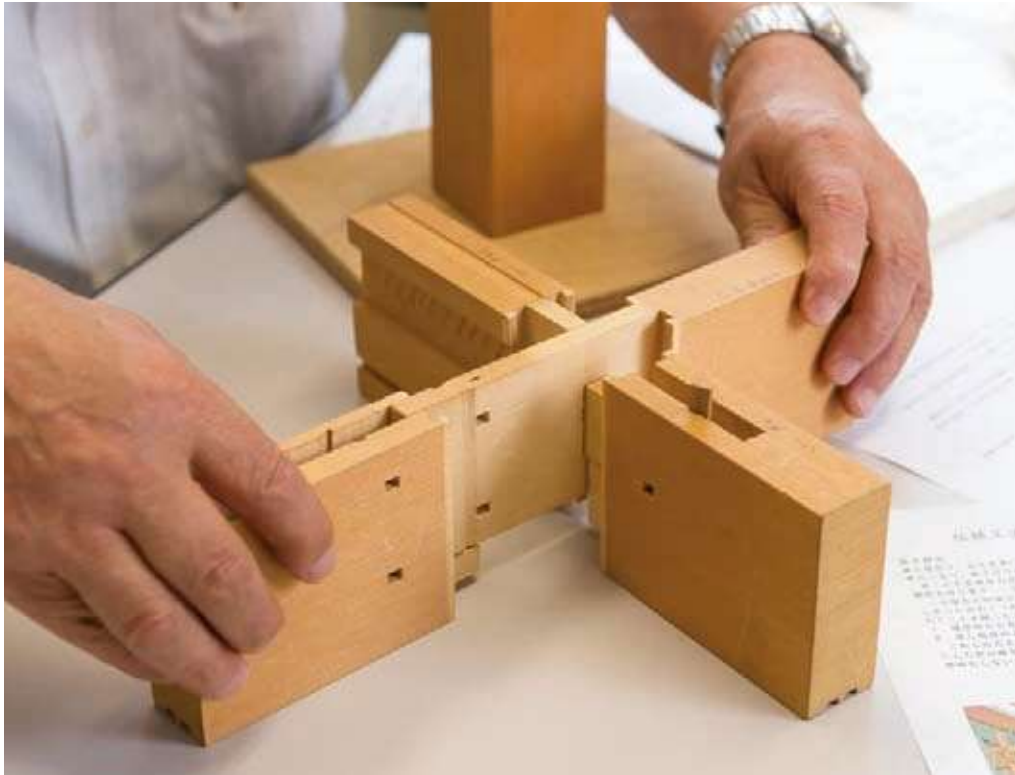
西澤 政男さん

にしざわ・まさお

選定保存技術保存団体 特定
非営利活動法人日本伝統建築
技術保存会会長、文化財修理
技術保存連盟理事長。社寺の
設計施工、国宝・重要文化財
の修理工事などに長年携わっ
てきた。

宮大工

時間をかけて つくり上げる日本の家



日本の伝統工法では複雑に木を組み合わせて柱、梁などを組み立てていく。地域によって構法には微細ながら差があるという。
写真はめがねぼの工作法

大工を始めて50年、いつも家を建てる時には「長く残るものをつくりたい」と考えます。では、長く残るものとは何か。

文化財の修復に携わる中で分かってきたのは生命力の強い建物には個性のアクがない、つまり、建てた人の主張が強くないということです。

逆に建築家の思いをそのままに表現した建物は嫌味になってしまい、世代を超えて生き続けるものにはならない。自分が、自分が、という目立つ自己主張は生き残れないのです。

現代の教育では模倣はよくない、独創に意味があると教えます。しかし、伝統は長年の間に凝縮され、不要なものを削ぎ落としてきた知恵です。まず、これに学び、その上での創造がなければ長く生きる建物は作れません。

もし、伝統的な日本家屋は高くて手が出ないと思うのなら、一度に全部つくらず、少しずつつくっていく方がいいのです。平成初期までは普通にあつたつくり方で、3代かけて1軒完成する例も見られました。今なら、わが子が成長し小学生になったら子ども部屋をつくるというようなやり方でしょうか。

古来から日本では、一度にすべてを完成させてしまうと「魔が憑く」と言われて嫌ったもの。少しずつ、子孫に残せるいい家をつくると考えれば、その過程も楽しみになるはずです。



1 室内に光を取り入れ、閉そく感を和らげる襖の一部に障子をはめ込んだ中抜き襖。香道の香図がモチーフ。2 縁側を部屋の外に巡らすことで、部屋を保護し、ゆとりを生む。部屋と縁側を仕切るのは雪見障子。3 写真右手、床の間の脇にあるのは出書院窓



1 簾は窓際に吊るすことで日光を遮り、室内の涼しさを保つ仕組み。2 建替え前の家から持ってきたという「松に鷹」の絵柄の欄間。3 2年前に西澤さんが手がけたM邸。4 玄関は天井様式の中でも格が高いと言われる格天井。美しい木目を楽しめる

和の住まいは、「暮らしの文化」の継承

梶浦 秀樹さん



日本の家の美しさは、ミニマルな空間にある。

野の花を差し入れれば、季節感とともに

空間が締めまり、おもてなしの表情に。



profile

梶浦 秀樹 (かじうら ひでき)

1956年東京都生まれ。庵代表取締役。
東京大学法学部卒業、日本国有鉄道、
小売全国チェーン代表取締役、西武し
んぎんキャピタル取締役などを経て、
2003年に庵を設立。



私たちは京都の古い町家を再生し
て、一棟貸しで滞在施設として使っ
ていただいています。それは自分の
家が京都にあるような感覚を味わっ
ていただきたいからです。

今は核家族化が進んでいますか
ら、家族全員が同じ家に住んでいな
い場合も多いでしょう。そうであれ
ば、家族で旅行するときには、おじ
いちゃんも、おばあちゃんも、お孫
さんも一緒に気兼ねなく過ごせる空
間が欲しい。民家を一棟まるごと使
えば、自分の家のようにリビングや
畳の座敷に家族みんなで集まって食
事をしたり、会話を楽しんでいただ
けます。だから一棟貸しにしたいな

と思ったわけです。

町家再生から見えた暮らしの文化

そういうニーズなり、使い方を想

定しながら古い家に手を入れるとい
うのが、私たちの基本的な考え方デ
す。格好よくするのはなく、でき
る限り日本の家を持っている美しさ
を残しながら、現代の生活スタイル
に馴染んでいる方々、海外から日本
に来てくださる方々にとって居心地
のいい場所をつくりたい。

私たちが再生する町家はもともと
伝統的な技術や手法に則って建てら
れています。途中で必ず何らかの



手が入っています。建具がアルミサ
ッシに替えられていたり、ベニヤ板
と壁紙で室内を仕上げてある場合も
少なくありません。これをできるだ
け元に戻した上で、さらに100年
以上持つように改修することを心が
けています。

日本の家の美しさは、ミニマルな
研ぎ澄まされた空間にあります。そ
こにわずかに手を加えて、さらに空
気をよくする。茶室がそうですね。
花器に一輪野の花を生けると空間が
ビシッと締まって、季節を感じさせ
るとともに、お客様をもてなすのに
ふさわしいしつらえが整います。

日本中に美しい町が残っています

が、そういうところがいま過疎化・

高齢化によって空き家だらけになっ
ています。このような空き家を京都
でやっているのと同じように再生し
て、滞在したり、食事をしたり、も
のを買ってもらう場所にする。結果
として賑わいが生まれ、雇用が生ま
れ、若い人たちが町に戻ってきて、
「暮らしの文化」が継承できるので
はないか。そういう仮説に基づき、
10年前から活動しています。

「暮らしの文化」とは、衣食住す
べてに関わる地域の営みそのもので
す。そういった暮らしの文化を味わ
う仕組みが、これからの観光には大
事です。

地域の文化を見直して、
美しい日本を次世代に引き継ぎたい



池坊 由紀さん

いけのぼう・ゆき

1965年、京都市生まれ。華道家元池坊次期家元。1988年学習院大学国文科卒業。次期家元として、全国各地の花展等への出瓶や講演、シンポジウムへの参加、海外でのいけばなの普及にも尽力している。

生
け
花

廊下の片隅にスツールを置き 床の間代わりに花を飾る



「日本の文化だからと固く考えずに、それぞれの日々の暮らしの中で自由に花に関わったり、季節を取り入れる工夫をしていた
だきたいですね」

日本の住まいと生け花の関わりを考えたとき、まず思い浮かぶのは、和室の床の間と生け花の組み合わせではないでしょうか。床の間は開口部の位置によって光の差し込み方が異なりますが、そこに飾る花も光の方向に合わせて形を変えるのが習わしです。つまり、生け花は人間が見て美しいだけでなく、自然と寄り添いながら形を生むのですね。

こういった習わしは、日本人がこれまで自然を意識してきたからこそ生まれた発想です。床の間や生け花の考え方からも分かる通り、日本人は室内にいても常に自然とともにある。あえて外と内を区切らず、家の中でも自然を感じられるような表現を取り入れてきたのだと思います。

和室や床の間がなくても、その考え方は、これからも変わらず住まいに引き継いでいきたい。家の中のどこかに自然の移り変わりを意識する、静的で、ある意味スピリチュアルな場を自分なりにつくるといいですね。そこが、季節や行事に応じて花や掛け軸が移り変わっていく、からっぽのように見えて充実した空間になります。

たとえば、今の住まいにある棚を活用したり、廊下の片隅にちよつとしたテーブルやスツールを置いたりするくらいでも十分なのです。その場をつくった瞬間から意味ある空間に生まれ変わります。しょう。



堀井みち子さん

ほりい・みちこ

公益社団法人全日本きものコンサルタント協会教授。長年に渡り、着装、着物のよさを伝えてきた。自身も1年中着物で過ごす着物好き。

着物

子どもの記憶に 一生残る着物姿を



着物を着ると自然に歩幅が狭くなり、少し内また気味に歩くことになるが、これは着崩れを防ぐ自然な知恵でもある

着装（着付）を習い、着物が着られるようになった人の多くが「いつもと違う時間が流れているような気がする」とおっしゃいます。

着装はそんなに面倒なものではなく、また、身につけているときも生活のいろいろな動作に不自由があるわけではありません。それでも着物を装うだけで、ゆつたりした気持ちになり、いつもは気づかなかった路傍の花に目が留まる。所作を気にするようになり、仕草が美しくなる。着物にはそんな力があります。

和室には1畳を何歩で歩くですとか、縁や敷居を踏まないなどの作法がありますが、着物であれば、いずれも自然にできること。茶道、華道、そのほか、和の文化は和室と着物があって生まれたものだ実感します。

と言っても、着物を文化として棚に上げ、偉いもの、遠いものにしてしまっただけではありません。もっと日常的に楽しむものにならないと、文化は広がりません、続きません。

私の提案は、着物で子どもと一緒に雛祭りやお月見などといった季節の行事を楽しむこと。私も子どものころに目にした、母の節目節目の着物姿を特別な日の思い出として懐かしく覚えています。子どもの記憶に一生残るものとして着物姿があるとしたら、装う楽しさも増えるというものではないでしょうか。



重川 隆廣さん

おもかわ・たかひろ

1951年、新潟県生まれ。新潟大学大学院自然科学研究科博士課程修了。博士(工学)。一級建築士。日本建築学会北陸建築文化賞、新潟県経済振興賞など受賞。重川材木店代表取締役。

伝統
建築

伝統的な日本の家は
高い精神性を備えている



和の住まいは、一つ一つの家ばかりでなく、それらが連なることで街なみができてくる。そうした日本らしい家並みの風景が、子どもたちにも優しい心を育てていくのでは

これからは、木・土・紙・畳など伝統的な材料を用いながら現代風な暮らしができる家が求められるのではないだろうか。これらの材料を上手に使う、和の雰囲気を感じられる、現在の暮らし方に合う住宅をつくることは十分可能です。私は、築50数年の家に暮らしています。材木屋だった父がつくった家です。新潟県の山で切った木を適材適所で使っています。最近、特に感じるのは、その建物が力を与えてくれるというか、パワーを感じることです。

日本の伝統的な木造住宅の作法も大切です。古くから決められてきた寸法に基づいてつくられた家は、プロポーションは完成されており、かなり精神性の高いものを持っているのだと、歳を重ねて感じるようになりました。書道でも、中国の古典をしっかりと修めて書いたのと、その書いたものを真似だけして書いたのとは違いますよね。

日本人のそうした高い精神性を継承するうえでも、和室は必要ではないでしょうか。一昔前は、畳の縁を踏まないとか、掃除をするときは雑巾をしっかりと絞って、畳の目に沿って拭くといった住まいの作法がありました。これらのさりげない作法にも精神性が宿っています。昔からのこうした住文化を、親が子どもに教え、子どもが孫に教える。そんな暮らしが、今あらためて見直されてよいと思います。

和を楽しむ

和の知恵を生かす

和の文化を伝える



伝統的な木割に基づいて設計・施工された広間。柱、鴨居、長押、廻縁など仕上材の寸法は、伝統的作法に則っており、現代的な要素を取り込みながらも、和風住宅の品格を感じさせる

和の心を育む

日本の住まいの知恵



無垢のフローリングのダイニングキッチン。窓に障子をあしらうだけで、洋室にも和の雰囲気をつくり出すことが可能だ



小堀 賢一さん

こぼり・けんいち

全日本宗教用具共同組合理事長。1988年設立の同組合は仏壇の公正な取引のルールづくり、消費者への情報提供などを行っている。

拝
む

仏壇を前に 三世代一座、家族がつながる



住宅の広さと仏壇の有無、サイズには相関関係があるそうだが、最近はコンパクトで家具ともなじむような仏壇が多数販売されている

仏壇の発祥には2説があります。一説は天武天皇が685年、諸国の家ごとに仏舎を置き礼拝せよと命じたというもの。日本書紀に書かれており、実際に、飛鳥、白鳳、天平の時代につくられた仏壇も現存しています。

もう一説は江戸時代半ばに幕府が寺院に対して国民を管理するように、檀家制度を構築した際に始まったというもの。この2説の間には1000年もの開きがありますが、いずれにしても古いものというわけです。

ただ、実際の使われ方を見ると、伝統を重んじ、宗教として礼拝するというよりも、ご先祖様を大切にするといった素朴な気持ちで手を合わせる方が多いようです。海外でもリビングにおいて様やおとう様の写真が飾ってある光景を見ますが、仏壇はそれに近い身近な存在と言えるのではないのでしょうか。

仏壇のある家では法事などで家族、親族がよく集まりますが、これは家族の歴史や知恵、地域の風習や食文化などを伝え、家族の絆を深める場になります。親、子、孫、つまり三世代一座の場はなかなかありませんし、父から子では年代が近づいて教えるにくいことや反発されがちなことでも、祖父から孫となれば素直に伝わります。仏壇には、家族が集う場を提供し文化を伝承する力があるわけですね。



安藤 直人さん

あんどう・なおと

1950年東京都生まれ。東京大学農学部林産学科卒、同大学院修士課程修了。農学博士。東京大学大学院特任教授、東京大学名誉教授。

木でつくられた住まいは、
日本人のDNAに
深く根ざしたものです。

木

時を刻む住まい 和を大切に作る住まい

工業化の20世紀が終わって、環境の時代が意識され、時を刻む材料がよいという評価に変わってくると思います。和の住まいには、木がある、土がある、草がある、紙がある。そういう時を刻める材料の集合体で、

工夫されたものだと思えることができます。人間は高感度なセンサーを持

木を含めたこれらの自然の素材は、見た目や匂い、肌触りなど、おいに五感を刺激するところがあります。人間は高感度なセンサーを持

工場の20世紀が終わって、環境の時代が意識され、時を刻む材料がよいという評価に変わってくると思います。和の住まいには、木がある、土がある、草がある、紙がある。そういう時を刻める材料の集合体で、

っているから、敏感に感じ取るのです。さらに言えば、日本人に脈々と続くDNAというような部分が、素直に受け入れる材料なのです。

木はそれほどすぐには傷みません。ただ色は変わります。それは、

汚れるわけではなく「味がつく」のです。外壁に使うと当初は雨がかかってムラだらけになります。一様になるのに20年程はかかります。

「昔のもの、古いものはいいなあ」と感じるのは、ムラを通り越した後

の姿を見ていいと思っているわけですね。だから、変化を待つのです。

一様に変化するためには、手入れをしていく仕組みを整えたり、使う人にライフスタイルとして手入れやその重要性を教えないといけないかもしれません。住まい方の技術といってもよいかもしれません。

ただ、今の若い人たちは「スローライフ」と言い方を替えて、こうしたことを理解するようになってきている。これには希望が持てますね。

「人の和」を育む住まい

今の日本は、生活習慣の洋風化に

伴って個人主義がはびこり、同じ一つ屋根の下に住んでも家族はバラバラです。それぞれが個室にこもって関係を絶ち、テレビを見たりゲームで遊んだりしています。

一方、昔は障子や襖で部屋を仕切ることによって一定のプライバシーを確保していましたが、隣室の気配を感じることができました。昔の家では、家族が緩やかに繋がっている」という安心感を自然に持つことができたのです。

また、しつらえについてもそうです。今は床の間がなくなり、掛け軸を掛けたり、人を迎えるために花を生ける習慣がなくなりました。しつらえというのは、自分のためにやっているわけではなくて、相手を思う気持ちです。

「和の住まい」とは、家族はもちろんお客との関係性、つまり調和、仲良くする意味の「和」でもあります。これは、全体的なバランスがないと納まりません。家を一歩出ると、和は向こう三軒両隣、ご近所、そして集落、村へと広がっています。これこそ日本の生活だと思えます。

戸外

坪庭・中庭

つばにわ・なかにわ

坪庭や中庭は、かつての町家によく見られ、採光・通風・鑑賞などを目的として設ける、建物に囲まれた小さな庭を言います。



3方の部屋から眺められる緑豊かな中庭（写真：②）



玄関の正面に坪庭を設けることで、明るく開放的な玄関を演出（写真：①）

戸外

植栽

しょくさい

植栽は、鑑賞や修景以外に、日射遮蔽・防風・材木・食料（果実等）・燃料（薪）等の確保など様々な目的で植えられます。



住宅のアプローチや境界部の植栽。地域の景観向上にも貢献（写真：①）



日射遮蔽のためのよしずの役割を担う、つる性植物による緑のカーテン（写真：⑦）

戸外

前庭

まえにわ

民家の前庭は、人を迎える導入のスペースであるとともに、地域のコミュニティに開放され、半公共的な機能をもたせることもありました。



伝統的な民家における落ち着いた趣の前庭（写真：①）



日中は遊び場にもなる住宅アプローチ部分の駐車スペース（写真：①）

配置

建物配置

たてものはいち

建物の配置の工夫により、季節風に対応したり、密集市街地の採光・通風を向上させることができます。



風の弱い東に向いて建つアズマダチ、西側には屋敷林（カイニヨ）を植樹（富山）



町家の坪庭の配置を近隣と協調することで、採光や通風を確保し合う

装い 囲炉裏 いろいろ

住宅内の床面を切り下げてつくられた炉で、調理・食事、採暖のために設けられます。最近では囲炉裏は少なくなりましたが、火を利用する例として、炉を組込んだ座卓、薪ストーブなどがみられます。



周縁部にものを置ける板をまわした囲炉裏（写真：①）



リビングに薪ストーブを設けた例。吹抜けて上階と連続する家族中心の場（写真：①）

素材 土壁 つちかべ

土壁とは、こまかい小舞と呼ばれる竹や木で組んだ格子を下地とし、土を塗り重ねた壁を言います。日本の伝統的な壁工法で、仕上げには漆喰や聚楽土などが用いられます。



小舞を組み、何層にも土を塗り重ねてつくる



土壁の風合いを生かしたインテリア（写真：①）

素材 自然素材 地域産材

しぜんそざい ちいきさんざい

住宅に使われる自然素材には、木・紙・土・石・竹など様々なものがあります。住宅を建てる地域で調達される材料は地域産材と呼びます。



地域材（金山杉）と漆喰、畳、和紙などの自然素材でつくる健康的な住まい（写真：⑥）



地域に残る民家を改修した住まい。自然素材を多用（写真：⑥）

戸外 濡れ縁 ぬれえん

濡れ縁とは、建物の外部に設けられる雨ざらしの縁側で、木板や竹などでつくられました。現代のウッドデッキ同様、室内の延長として利用できます。



室内から濡れ縁、外部に至るつながり（写真：①）



深い軒下に設けられた濡れ縁（ウッドデッキ）。室内の延長として空間に広がりを与える（写真：②）

内部意匠

真壁

しんかべ

柱や梁などの構造材を表に見せる壁のつくり方を言い、構造材以外の部分は土壁や面材を下地とし、塗り壁・壁紙などで仕上げます。構造材を見せない大壁に比べ、構造材の状態が容易に分かります。



落ち着きと温かみを持たせた真壁の部屋を洋間として使用



真壁と障子の意匠によりダイニングと和室を一体感のある雰囲気にしつらえる（写真：①）

内部意匠

大黒柱

だいこくばしら

大黒柱は、元来民家の平面の中央付近の構造上重要な太い柱で、家格の象徴として設けられました。最近でも家族やその集いの象徴する太い柱を「大黒柱」としてリビング等に設ける例も見られます。



土間と座敷の間の大黒柱。畳を切り欠かないよう敷居位置をずらしている（写真：①）



板の間における大黒柱。吹抜けと組み合わせられ、視覚的に2階にもつながる（写真：①）

装い

床の間

とこのま

座敷の床の間は、構成要素や形式が決まっていますが、最近では自由な発想の床の間や花や季節のものを飾る場所を、様々に工夫して設ける事例が増えています。



定型に近い床の間（写真：①）



玄関の正面に床の間風の飾り棚が設けられている（写真：①）

装い

仏壇・神棚

ぶつだん・かみだな

住まいの中の礼拝及び祖先を祀るスペースであり、家族の大切な思い出を顧みる場でもあります。住まいの中にこうした場を設ける日本の文化です。



リビングに連続する和室に仏壇を設えた例（写真：①）



押入上部に神棚を設置。神棚は壁面からの持ち出しが多いが、専用スペースを確保（写真：①）

和を楽しむ

和の知恵を生かす

和の文化を伝える

和の心を育む

日本の住まいの知恵

内部空間

吹き抜け

ふきぬけ

上下の2つの階にまたがる天井の高い空間を言います。上下階のつながりや、空気の循環をうながします。



京町家における通り土間の吹き抜け。採光と換気の機能を担っている



吹き抜けを介して家全体がひとつながりで一体感を感じられる

ゆか

畳 (和室)

たたみ わしつ

畳は日本の住まい、和室を象徴する床の仕上げ材です。元来、心材（畳床）は稲わら、表面材（畳表）はい草を材料としてつくられた、調湿性能のある自然素材です。



2面が板の間に面した畳の間。間仕切りの障子は3／4開放でき、一体感、連続性が大きい（写真：①）



半畳縁なしの畳はニュートラルな雰囲気で、洋間的な用途にも使いやすい（写真：①）

ゆか

板の間

いたのま

木板を張った床で、樹種、板厚、板の巾及び塗装の種類等は様々です。無垢板は柔らかく、温かみのある触感です。



温かみのある樹種を用い、椅子座と床座の生活を両立する空間をつくる事が可能（写真：①）



塗装の種類、色によっては光を柔らかく反射して、部屋全体を明るくする（写真：①）

ゆか

土間

どま

土間は、元来、土や三和土^{たたき}などで仕上げられた床で、現代ではタイル、瓦などを敷き込むこともあります。室内空間ですが、戸外的利用も含め多用途に利用できます。



玄関から連続する土間スペース。自転車の収納やおしゃべり等多様な趣味空間を形成（写真：①）



集合住宅でバルコニーに面するリビングの一部を土間にした例（写真：①）

内部建具

欄間

らんま

建具上枠（鴨居）と天井の間に設ける建具や飾りを言います。元来は襖、障子上部のもののことでしたが、最近では洋間の開き戸の上部に設ける例も見られます。



伝統的な民家における襖上部の伝統的な欄間（写真：①）



通風を確保するため開閉機能を持つ欄間（写真：①）

内部空間

続き間

つづきま

続き間は、本来、襖で仕切られた和室二間で、襖を外せば広間として使えます。現代の和室と洋室をつなぐものも、ここでは含めて扱います。



和室二間を襖で仕切った続き間（写真：⑥）



板の間のうち畳の間に面する部分のみ畳敷きとし、連続性を高めた例（写真：①）

内部空間

縁側

えんがわ

縁側とは戸外と主室の間に設けられた板敷の廊下状の空間で、主室に至る動線や主室の補助スペースとして利用されます。濡れ縁と違い、縁側は室内空間です。



伝統的な民家における部屋から庭につながるあいだの落ち着きのある縁側



最近の住宅における和室前面の縁側（写真：②）

内部空間

玄関

げんかん

住宅の主要な入口を言います。現代の住宅では、最小限のものが一般的ですが、収納やちょっとした接客スペースを設けるなどの工夫も増えています。



畳敷きの玄関。座って来訪者を迎えることができるしつらえ（写真：⑧）



ちょっと坐れるおしゃべりスペースを確保した玄関（写真：④）

開口部 雨戸 あまど

開口部を風雨から守るために、開口の外側に設けられた板引戸を言います。最近ではシャッターや可動ルーバーが組み込まれた製品もあります。



伝統的な民家における板戸の雨戸



可変ルーバータイプの雨戸（写真：⑨）

内部建具 襖 ふすま

木の骨組に紙を下地貼りし、表面を紙または布とした建具を言います。襖紙、下地、縁、引手に様々な種類があります。



引込み形式の襖（写真：①）



現代の住まいにとり入れられる襖（写真：⑩）

内部建具 引戸 ひきど

水平方向にスライドさせて開閉する建具を総称して引戸と言います。片引き・引違い、面材・格子など、形式や仕様は様々です。



伝統的な民家における間仕切り板戸の引戸（写真：①）



室内の通風のために上部に無双（2枚の板を左右に移動させて開閉する戸）を組み込んだ内部建具（写真：①）

内部建具 障子 しょうじ

木枠（組子）に紙を張った建具を言います。木枠の組み方やプロポジションによって、和風から洋風まで様々な趣を感じさせることができます。



細やかに視線を制御する雪見障子（猫間障子）



洋風のインテリアに障子をマッチさせた例（写真：①）

外壁

掃き出し窓

はきだしまど

掃き出し窓は、床面の位置から内法（鴨居）レベルまで開いている窓を言います。各室が外部から出入りでき、引違いや引込み等の開口形式があります。



伝統的な民家における屋外と室内の一体性を高める掃き出し窓



引込み形式の掃き出し窓を全面開放して、リビングと外部デッキ・庭との連続性を高める（写真：①）

外壁

窓庇

まどびさし

窓の上に取り付ける庇を言います。直上に屋根がない場合、軒やけらばの出が小さかったり距離がある場合に、雨水対策や日射遮蔽に有効です。



妻壁の開口部に設けられた窓庇（写真：①）



上部に軒庇のない掃き出し窓に取り付けた庇（写真：⑨）

開口部

日除け

ひよけ

(すだれ・よしず)

すだれ（簾）とは、よし（葦）や細い竹を、糸や細い縄で編み連ねたもので、窓の外や軒先に垂らして日射を遮蔽できます。



軒先に吊るされたすだれ。軒先から少し内側に設けたほうが耐久性は向上する（写真：⑦）



窓庇の先端に、すだれを吊るするためのフックが取り付けられている（写真：②）

開口部

格子

こうし

細い角材を縦若しくは横、縦横に隙間を開けて組み、建物本体や建具に取り付けます。視線・通風・明るさなどを制御します。



伝統的な京町家で通りからの視線制御を主に意識している



格子戸を締め切ると、風を通しつつ中からは見え、外からは見えない。まぶしさも緩和（写真：①）

外壁

板壁

いたかべ

板張りの壁（板壁）は、元々は外壁の塗装面を風雨から保護する目的で用いられてきた外壁仕上げです。下見張り、縦羽目張りなどの工法があります。



外壁の上部は漆喰壁とし、雨掛りの多い腰壁を板張りとした例（写真：①）



板壁を部分的に張り替えた後に塗装を施す。補修箇所が目立たず全体が馴染む（新潟・和島）

外壁

漆喰壁

しっくい かべ

漆喰は、土壁の上塗りなどに使われる水酸化カルシウム（消石灰）を主成分とした建材です。外壁だけでなく、内壁にも使えます。



伝統的な民家の漆喰壁



左官職人の手仕事による風合いのある内部の漆喰壁（写真：⑥）

開口部

高窓・天窓

たかまど・てんまど

高窓は、外壁の上部に設ける窓を言い、天窓は天井面に設ける窓を言います。採光や排熱・通風に効果があります。



伝統的な町家の土間の採光と換気を確保する高窓と天窓



通常の天井高さで内法の上部が開口となっている高窓の例（写真：④）

開口部

地窓

じまど

地窓は、床面に接して設ける外壁の窓のうち、高さが低いものを言います。採光や換気、戸外の観賞の機能もちます。



伝統的な町家中庭に面した開口



収納下部に設けた換気に配慮した地窓

屋根・軒

勾配屋根

こうばいやね

雨の多い日本では、屋根に降った雨水を速やかに排水できるように、勾配のある屋根が発達してきました。



勾配屋根は雨水を早期に排水し、屋根の防水性を向上（大分）



雪割棟を設け、金属葺きとして屋根雪を自然に落とす。山並みに調和（富山）

屋根・軒

瓦屋根

かわらやね

日本の瓦の歴史は古く飛鳥時代までさかのぼります。瓦は日本の気候風土に適し、耐久性と美観を兼ね備えた屋根材料と言えます。



瓦の美しい屋根並み（富山・八尾）



地域産赤瓦による地域固有の景観（島根・石見）

屋根・軒

越屋根

こしやね

越屋根とは、元々は囲炉裏やかまどの煙出しなどのため、屋根の上に一段高く設けた小屋根を言い、現代の住宅にも上手く取り入れられています。



美しい景観を創出する越屋根（写真：①）



越屋根の頂側窓からそそぐ柔らかな光（写真：①）

屋根・軒

深い軒

ふかいのき

降雨から外壁を保護し、夏の日射を遮蔽できるように、屋根の軒を深く出す建築様式が発達してきました。



屋根を軒・けらば共に外壁から大きく張り出し、外壁を保護し雨の掛かりにくい外部空間をつくる（山形）（写真：⑥）



深い軒による陰影のある美しい外観（熊本・水俣エコハウス）（写真：⑦）

日本の住まいの要素

現代における4つの「住まいづくりの目的」を達成するためには、建物の形式、材料・構法、空間構成などの要素（ハード面）と、住まいを維持・管理し活用する方法（ソフト面）の両方を上手く用いなければならないでしょう。

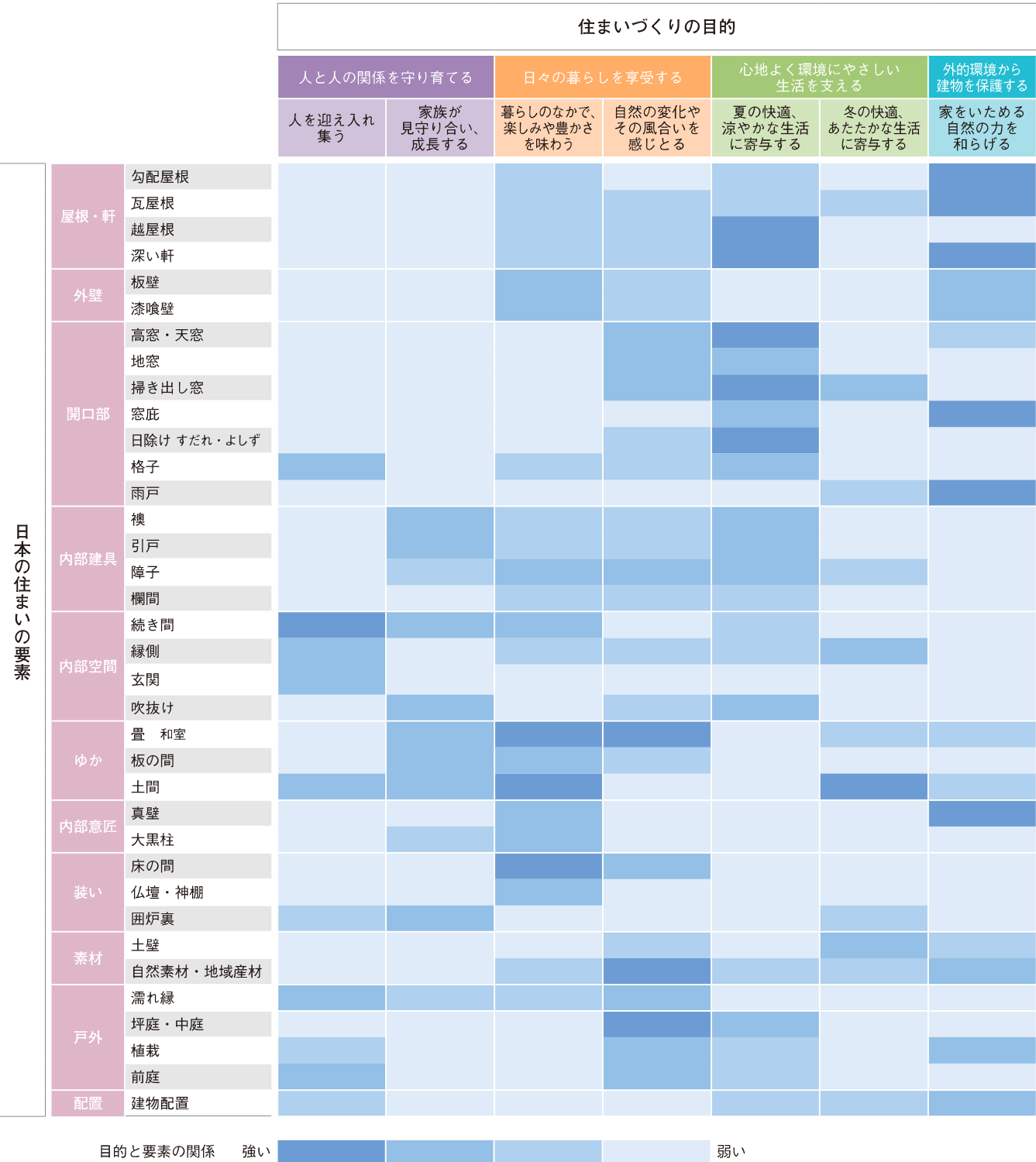
手引きでは、このうちハード面の「日本の住まいの要素」を36種類取り上げ、その概要と事例を紹介します。事例は、住まいづくりに参考になりそうな手法・技法を、伝統的な住

まいと現代の住まいから広く取り上げます。

下の図は「日本の住まいの要素」と「住まいづくりの目的」の関係を表しています。住まいづくりで重視しようとする目的を実現するためには、関係が深い要素を採用することが有効になるでしょう。

ご意向や条件に応じて採用できそうな要素を探すヒントにしてください。

「日本の住まいの要素」と「住まいづくりの目的」の関係



☞ 勾配屋根 瓦屋根 深い軒
板壁 漆喰壁 窓庇
雨戸 植栽 建物配置

湿気から建物を守る

台風の常襲地や季節風の強い地域などでは、建物周囲に樹木を配するなど、「植栽」により風や雨の影響を緩和する工夫もみられます。東北の「イグネ」、富山県砺波地方の「カイニヨ」などの屋敷林などの例があります。

これらに掲げる知恵や工夫に共通するのは、自然の大きな力に対して謙虚に向き合い、逆らわず、無理をせず、力を和らげる考え方です。建築技術や材料が発達した現代でも十分に有効な方法であり、積極的に取り入れることが望まれます。

高温多湿なわが国では、主体構造の土台・柱・梁などの木材を腐らせないようにすることが、重視されてきました。

「真壁」は構造の柱や梁を表に見せて、その内法を壁仕上げとする構法です。構造材が常に空気に触れているので乾燥しやすく、耐久性に優れ、改修もしやすい工法です。換気性能の高い床下や小屋のつくりは、床組や小屋組の木材の乾燥に効果があります。また、「高窓」は室内で暖められた空気の排出に有効です。「畳」(伝統的な製法による稲わら畳床)に用いられるい草・稲わらや内壁仕上げの左官材料の多くは吸放湿性が高く、室内の湿気や水分を吸収・放出するので、結露防止などの効果が得られます。



越屋根に設けた開口を開放して、暖められた室内空気を排出する (写真：①)



敷地周囲の生垣により強風から建物を守る (鹿児島)



外壁を流れる水を切る水切り瓦 (高知)



小屋裏現しで天井を高く開放的にし、室内の空気循環をうながす (写真：⑥)



畳、漆喰塗などの自然素材を利用し、吸放湿性を高める (写真：①)

家をいためる自然の力を和らげる

風雨から建物を守る

年間降水量が世界平均の2倍で、台風の襲来が多いわが国では、強風や強雨、多雨から建物を守る工夫が古くから講じられてきました。

雨の影響を最も受ける屋根は、「勾配屋根」とし、「深い軒」を出すことが重要です。勾配屋根は、雨水を速やかに建物の外に排水するための合理的な形態です。軒は、雨を外壁面に当たりにくくして建物を雨から守ります。屋根を葺く「瓦」は、紫外線などにも強い耐久性の高い材料であることに加え、瓦の裏面に空気層があることで、雨水や湿

気が入った場合でも、その排水や乾燥をうながします。

外壁には、雨掛かりの影響を小さくするために、土壁の外側に「板壁」を設ける、防水性の高い「漆喰壁」とするなど、土壁を保護する工夫が一般的に行われました。雨の多い高知などで見られる外壁の水切り瓦は、壁を伝う雨水をこまめに切ることで、外壁に影響する雨水の量を軽減する工夫です。

開口部からの雨水浸入を防止する対策も重要で、「窓庇」や「雨戸」を設けることも効果があります。



妻壁の窓に付属する窓庇。開口部を雨から守るとともに、日射遮蔽の機能ももつ（写真：①）



耐久性の高い瓦の勾配屋根。降雨を建物の外に速やかに排水する



富山・砺波平野の防風機能を備えた屋敷林



通風機能を備えた雨戸。ルーバーは可動し、通風・採光・視線を制御する（写真：⑨）



土壁を保護する下見板を付加した外壁。雨掛かりの影響を軽減する

日射熱を集め蓄えて暖かくする

☞ 掃き出し窓 土間 土壁
自然素材・地域産材

冬に太陽からの日射量が多い地域では、日中の太陽熱を室内に取り入れて暖房の効果を得ることができます。暖房効果は、太陽熱を室内に多く取り入れて（集熱）、熱を蓄えて夜間などに持ち越す（蓄熱）ことで得られますが、屋根・壁・床や開口部などの断熱性を高めて熱が室内から外に逃げないようにすることが必要です。

かつての日本の住まいから、このうち集熱と蓄熱に効果のある手法を見出すことができます。

「掃き出し窓」などの大きな開口を設ける住宅のつくりは、集熱に適しています。「掃き出し窓」を南面に連続し

て設けることにより、集熱の効果が上がります。窓の上にある程度深い軒があっても、冬期は太陽高度が低いので、集熱が損なわれることは少ないと言えます。

蓄熱の効果を得るためには、土・石・陶器質タイル・瓦・漆喰など、熱容量が大きな材料を室内に用いることが必要です。「土壁」を外周壁や間仕切り壁に用い、漆喰塗り仕上げなどとすることも蓄熱効果を高めるために有効です。また、「土間」は熱容量が大きな材料を用いやすい床です。南玄関の土間床を大きく取りリビングにつなぐプランなども考えられます。



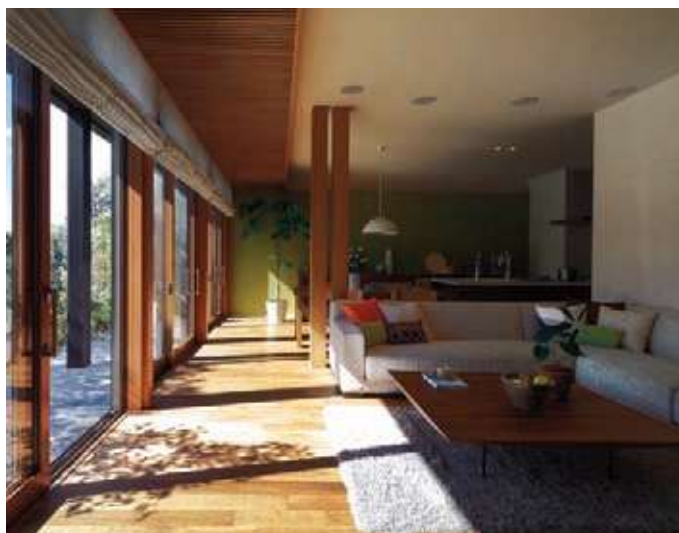
南面の連続する掃き出し窓と窓際の土間。大きな開口は太陽熱を取得する効果が高い（写真：②）



土壁や漆喰塗り仕上げの壁装。風合いがよいことに加え、土壁は蓄熱にも効果がある（写真：①）



南面の掃き出し窓と窓際の土間。土間床のコンクリートなどは蓄熱性が高い



南面の連続する掃き出し窓と石張りの床。石やタイルなどは蓄熱性が高い（写真：②）

冬の快適、あたたかな生活に寄与する

熱移動を調節し寒さを緩和する

☞ 縁側 雨戸 障子

住宅の断熱性をできるだけ高めて、冬に室内から外に熱が逃げないようにすることは、あたたかく暖房エネルギー消費の少ない住宅づくりを目指すときの基本となる考え方のひとつです。かつての日本の住まいは、断熱性の面では劣っていましたが、室内と屋外の境界部分に、断熱性の向上に寄与しうる要素が幾つか使われていました。

「縁側」は主室と戸外の間に設けられた幅3尺から6尺程度の板の間で、縁側と和室の間は通常障子で仕切られて、熱的な緩衝空間として機能しています。主室を直接外面させず縁側を設けることにより、厳しい戸外環境の影響を小さくし、主室の環境を保つ効果が期待されます。現代のサ

ンルームなどは環境調整空間の新しい形と言えます。

また、雨戸、網戸、ガラス戸や障子といった様々な外部建具を組み合わせ、季節や地域の気候特性に応じて使い分けることも大切です。戸外の寒暖、風雨、昼夜などの変化に応じて、住まい手自らが開放・閉鎖を使い分け、室内環境の維持・形成に役立てることができます。「雨戸」は風雨から開口部を守ること以外に、防犯、遮音、断熱にも役立てることができます。冬の戸外の寒さに対しては、戸の素材や戸と枠の取り合いなどを工夫することにより、断熱性を高めて寒さを和らげることも可能です。



縁側は部屋と屋外の緩衝空間となり、熱の移動を調節する（写真：②）



外から雨戸、網戸、ガラス戸と障子を複合。季節や気候特性に応じて様々な建具を組み合わせることが大切（写真：⑦）



縁側の熱調節機能を高めるために、縁側と戸外、主室のあいだの建具のつくりを工夫する（写真：④）



伝統的な民家の雨戸。風雨から開口部を守る戸であるが、防犯、遮音、断熱の機能ももち得る



集合住宅の居室とバルコニーのあいだに土間風の中間領域を設け、建具で仕切り熱の移動を調節（写真：①）

日射を遮り室内への流入を抑える

① 深い軒 日除け(すだれ・よしず)
窓庇 障子 植栽

夏や春・秋の暑い日に、住宅内への太陽熱の過度な流入を抑制し、冷房に頼らないでも心地よい室内環境を保つために、とくに日射遮蔽は重要となります。

日本の住まいに古くから用いられた「深い軒」は、太陽高度が高くなる南からの日射を遮るのにとくに効果があります。また、太陽高度の低い西・東からの日射を遮るためには、窓の内外に遮蔽物を設けることが有効です。最近では室内にカーテンやブラインドなどがよく設けられますが、窓の外側に設置する方が日射を遮る効果は高く、古くからの「すだれ・よしず」はとて有効です。安価で取り扱いも簡便なので、窓庇や軒裏などに取付け用のフックを

設けるとよいでしょう。これらは日射を取り入れたい冬などには、取り外しできます。最近の外付けのブラインドなども、「すだれ」同様、遮蔽効果の高い建材です。

建物周囲の「植栽」に気を配ることも大切です。落葉樹を窓の位置と方位を意識して植樹する、照り返しを抑制するために建物に近い地表面を芝や土で覆うことなども、日射を遮る工夫の一例です。

また、屋根や外壁は、日射により温度が上がると室内側への放熱が生じるので、それを抑制するために、瓦や板壁を用いた場合でも下地に断熱層、通気層を設ける対策を講じることが望まれます。



室内にすだれを吊るし、日射の流入を抑制。見た目にも涼感と風情が感じられる (写真：①)



軒庇による日射遮蔽。太陽高度の高い南面では単独で使える手法 (写真：②)



紙障子で日射を遮るとともに視線を制御する



軒先から吊るした紐につる性植物を這わせた緑のカーテン (写真：⑦)



窓庇の先にフック状の金物を取り付け、すだれなどを設けられるようにする (写真：⑧)

[住まいづくりの目的] 心地よく環境にやさしい生活を支える

夏の快適、涼やかな生活に寄与する

自然の風を取込み涼感を得る

☞ 掃出し窓 高窓・天窓 地窓 越屋根
格子 続き間 吹抜け
襖 引戸 欄間 坪庭・中庭

蒸し暑いモンスーン気候のわが国では、「夏を旨にすべし」と言われてきたように、住まいに自然の風を取り入れて涼感を得ることが、古来より重視されてきました。

風を取り入れるためには、風の流入口と流出口となる開口部を壁に設けることが必要です。夏や春・秋における敷地の風特性を読み取り、卓越風が当たる壁面に「掃き出し窓」などの大きな開口部や、全開放できる開口部を設けることが効果的です。室内に滞留する空気は温められて上昇しますので、開放できる「高窓」を設けてそこから排出するとともに、室内の低い位置に「地窓」を設けて外部空気を取り入れ、室内空気の循環を促進することも有効です。

開口部の防犯性やプライバシーを高めるためには、大きさを工夫したり、「格子」などを付属させることで対応できます。

室内の通風性や空気循環性を高めるために、平面的には「続き間」を、断面的には「吹抜け」を設けて、連続性・一体性の高い間取りにするとともに、部屋と部屋の間を「引戸」や「欄間」で、開放しやすくしておくことも大切と言えます。

狭小な敷地の場合、「坪庭」や「中庭」を設け、日中日陰となる庭を通じて、温度の上がらない外気を室内に取り入れて、涼感を得る方法もあります。



吹抜けと1階、2階に大きな窓を設置。外部風を取り込み、住宅内での空気の動きをうながす



集合住宅の住戸の玄関収納下の地窓。プライバシー、防犯性に配慮して通風を確保（写真：③）



地窓と一般窓を組合せ、地窓には格子を設置。通風、プライバシーの確保とともに防犯や転落防止にも配慮（写真：⑦）



リビングに面する引込み形式の全開放できる掃き出し窓。対面にも窓を設けて室内の風通しをよくする（写真：①）

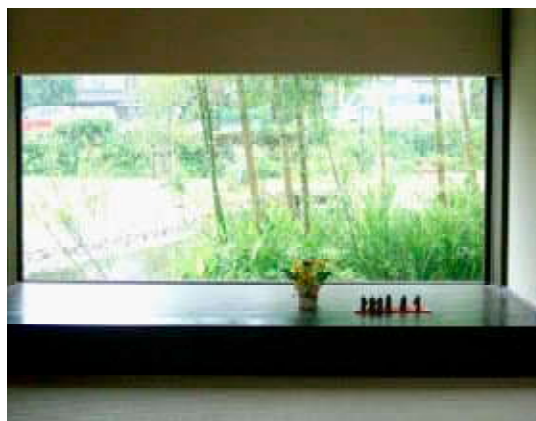
四季の変化を感じ、楽しむ

日本の四季の変化は、私たちの日常生活に潤いや豊かさをもたらしてくれます。かつての日本の住まいでは、戸外の植栽や木々などが季節とともに変わっていく様を、室内からも感じ、楽しむことが、大切にされてきました。

庭の各所には花木など「植栽」がきめ細かく施され、「前庭」には季節感を感じるシンボルツリーなどが植えられ、訪れる人を迎えました。

戸外と室内の間の境界には、庭の配置や植栽を考慮して「掃き出し窓」「地窓」などが適所に設けられ、戸外の自然の景観が、室内にいながら様々な場において望まれました。

また、敷地条件に応じ、「坪庭・中庭」を計画して室内と一体性の高い戸外空間をつくり、室内環境を少しでも心地よいものにする工夫が講じられてきました。



庭の緑への眺めを意図した大きな嵌め殺し開口(写真：⑤)

伝統的な民家の通りニワ上部に設けられた高窓。やわらかい光が採り入れられる



キッチン・ダイニングに面する大きな掃き出し開口を通して、庭の緑と季節感を日々感じられる(写真：①)

リビングの掃き出し窓に紙障子を立てて、日射をやわらかい光に調整する(写真：①)



光を採り入れる、制御する

かつての住まいには、腰壁のある窓以外に、掃き出し窓、欄間窓、高窓など様々な種類の窓が設けられていました。いずれも採光に効果がありますが、とくに町屋などに設けられていた「高窓」は、室の奥まで光を導き、光の均一性を高める効果があります。

地面で反射した光を軒裏でさらに反射させて光を導くこと、白漆喰などの反射率の高い室内仕上げとすることも、室の奥まで光を導き入れ、明るさを高める効果があります。

これらは室内の明るさの確保に寄与しますが、単に明るさを確保するだけでなく、陰影が生活に情趣をもたらすこともあります。「障子」「すだれ」などを窓に組み合わせることで、採り入れる光の量や質を調整し、少し暗くしたり柔かい光にすることもできます。また、プライバシーの確保にも役立てることがができます。

[住まいづくりの目的] 日々の暮らしを楽しむ

自然の変化やその風合いを感じとる

自然の素材を味わい、継承する

瓦屋根 土壁 漆喰壁 板壁
襖 引戸 障子 畳(和室)
板の間 自然素材・地域産材

かつての日本の住まいは、木、紙、土、石、竹などの自然の材料を基本としてつくられていました。それらの多くは地域で採取され、地場の職人により生産・加工され、経年時に修繕が施され、使い続けられてきました。

自然の材料は豊かな素材感や風合いを備えています。また、加工・製作にも工夫が施され、美しい造形が多くあります。それらが身近にあることは、人の感性の繊細さや感受性、愛着を育む効果があると言えるでしょう。

また、自然の材料は手入れに特殊な技術を必要としないものが多く、その方法は先代から伝えられて住み手自らが手入れを担っていました。それゆえに、住み手が住まいに

対し愛着を持ち大事にしてきたという面もあるでしょう。

現代の住まいにおいても、「瓦屋根」、「土壁」、「漆喰壁」、「板壁」、「襖・引戸」、「障子」などの木製建具、「畳」「板の間」といった自然の材料やそれを用いてつくられる建材を取り入れることは、特別なことではありません。とくに自然素材への関心は最近高まっています。自然の材料を用いることは、コストに多少の配慮が必要になることがありますが、暮らしの豊かさだけでなく長寿命で愛着のある住宅づくりやそのための地場の技術の保全にも奏功すると言えるでしょう。



障子の組子と和紙のテクスチャー、プロポーションを味わう



瓦屋根、漆喰壁の素材の質感、対比を楽しむ



和紙を用いた壁装の柔らかみのある素材感を味わう（写真：①）



畳、襖、障子、漆喰塗り、木の柱・差し鴨居の自然の素材で構成した和室。清潔で洗練された印象（写真：①）



外壁下見板張りの質感を味わう。経年により愛着が育まれる（写真：①）

趣味を実践し楽しむ

近年の余暇時間の拡大、所得の増加、情報化などとともに、住まいの中でも趣味を実践するライフスタイルが重視されています。読書、絵画、茶道、生花、料理、音楽、健康増進、DIY、ペット、園芸など、住宅のなかで実践される趣味には様々なものがあります。

趣味を十分に行うには、各趣味に応じて、汚れにくさ、吸音性や遮音性、座れる床、戸外とのつながりなどを備えたスペースが必要になります。けれども、例えば茶室のように、使い方が特定の趣味に限定される部屋を用意できるケースは少ないのが実情です。そのため先人の試みを活かして、「和室」「土間」といった普段は家族共用の場でありながら、必要時に別の目的に利用できる融通性・転用性の高いしつらえのスペースを確保することが現実的と言えるでしょう。これらのスペースと隣室や庭とのつながり・動線などに留意して、複数の用途に使いやすい場を創出する工夫が大切となるでしょう。



床面に堅牢な材料を用いた土間は、戸外の趣味生活にも対応しやすい(写真:①)

リビングに連続する和室に仏壇を設置。床の間のとなりに納められている(写真:①)



畳縁のない半畳を敷き込んだ和室。ニュートラルな雰囲気、様々な使い方に対応しやすい(写真:①)

押入の上部スペースに神棚を設置。床の間とともに飾りの要素となっている(写真:①)



思い出を受け入れ、心を落ち着かせる

かつての日本の多くの住まいには、「仏壇」「神棚」といった礼拝の場が設けられていました。これらは単に信仰や宗教上の用具ということだけでなく、昔は訪問客がまず仏壇に挨拶する習慣があったように、普段の生活のなかで礼節を知り学ぶ場としての意味もありました。

現代の生活習慣は昔とは著しく変わりましたが、現代でも、礼節を重んじる機会、祖先のことを思い敬う機会などは、自己の心情を顧み、気持ちが落ち着くとともに家族のつながりを再確認できる面もあるでしょう。

洋風化し、広さの限られた住まいにおいて、「仏壇」「神棚」のスペースを確保し、それを現代の意匠や家具などと調和させるのは難しい面もあります。しかし、例えば、マンションでも飾り付けのコーナーと一体にする、建具などで仕切れるようにする、将来のスペースを用意しておく(当面収納に用いる)などの工夫により、そうした場を形成し、継承していく方法があると考えられます。

[住まいづくりの目的] 日々の暮らしを楽しむ

暮らしのなかで、楽しみや豊かさを味わう

和の意匠を味わう

瓦屋根 漆喰壁 板壁 畳(和室)
真壁 格子 障子 襖 引戸
大黒柱 自然素材・地域産材

日本の住まいは、懐かしさ、落ち着き、愛着などを感じることのできる自然の材料が各所に用いられ、その素材を活かした意匠が施されていました。そうした素材や意匠は視覚的な豊かさを与えてくれるだけでなく、機能上も意味があり、継承されて使われてきました。

「瓦屋根」「漆喰壁」「板壁」は日本の住まいの代表的な外装材で、落ち着いた深みのある印象を与えると同時に、日本の多雨・高湿な気候風土に対して建物を保護する機能をもっています。

室内は「和室」で、柱を表に見せ壁に漆喰塗りなどを施す「真壁」を基本とし、建具や床材・天井材には木や竹、

い草・わらなどの「自然素材」が多く用いられ、柔らかで優しい質感を感じられるとともに、調湿などの効果もあると考えられています。これらの素材は耐久性が高いことに加え、入手し易く補修も比較的容易です。

現代の住まいでは、伝統的な素材や意匠のみで構成するのではなく、新しい建材や工法を組み合わせることが考えられます。椅子座の生活や大壁のしつらえと、自然素材やきめ細かさに配慮された和の意匠を工夫して、バランスよく組み合わせることにより、現代のライフスタイルにもよく合い、材料や建材の生産・流通状況にも対応した、新しい洗練された意匠を創出することができるでしょう。



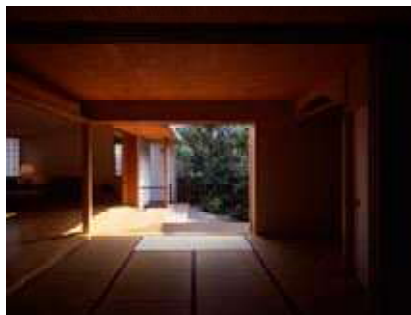
畳、雪見障子、襖、土壁（聚楽壁）。小さなスペースでも和の意匠が活かされ、居心地がよい（写真：①）



太い象徴的な柱を据えて畳の間を2方に開放。材のプロポーションに配慮され、板の間とも調和し、空間のメリハリを感じさせる（写真：①）



漆喰壁、瓦屋根の伝統的な住宅。落ち着きを感じさせる



和室と連続する庭。プロポーションの美しさと陰影による深みを感じさせる（写真：⑤）



かとうぐち（火灯口）と和紙を用いた壁装。温かさ、柔らかさを感じさせる（写真：①）

家族の気配や様子を感じる

襖 引戸 障子

続き間 吹抜け 畳(和室)

かつての日本の住まいでは、内部に横引式の「襖」「引戸」「障子」などの建具が使われてきました。洋風化・個室化が進んで和室が減少したことに伴い、現代の住まいでは回転式のドアを用いることが一般的になっています。

横引式の建具は、回転式のドアに比べて開放時に通行の邪魔にならず、開放寸法を自由に調整できます。隣の部屋の様子を視覚的に遮りたいときには閉鎖したり開放寸法を小さくし、生活の様子を窺い知りたいときには開放寸法を大きくするなど、使い分けることができます。こうした家族同士が日常的にお互いのことを気に留める暮らしを重ねて、他者との関係を配慮する気持ちが育まれることにつながるかもしれません。

今日、引戸や障子のデザインは工夫されたものが見られ、洋室に使用してもとくに不釣り合いになることはありません。とくに障子を用い、木の棧と紙が織りなす意匠の美しさにより、室内の雰囲気をも柔かく洗練したものにする事例も多く見られます。

最近では、個室よりも家族の共用スペースを重視した、連続性・一体性の高い間取りも見られるようになっていきます。家族が時間や空間を共有して、一緒に過ごすことを大切にするライフスタイルの現れと言えるでしょう。襖、引戸などの柔らかい間仕切りを上手く使い、そうしたライフスタイルに相応しい場をつくることもできるでしょう。



キッチンから見渡したりリビング。奥の土間と格子の引戸で仕切り、利用に応じて開閉（写真：①）



ダイニングと連続する畳の間、開放的なつくりで食事や寛ぎの様子が住宅全体に広がる（写真：①）



吹抜けを介して、1階と2階にいる家族が、お互いの様子をうかがい、声掛けする（写真：①）



キッチンで食事の支度をしながら、デッキや室内で遊ぶ子どもの様子が見られて安心（写真：①）

家族が見守り合い、成長する

家族の集いをうながす

☞ 畳(和室) 板の間
土間 囲炉裏

家族が住まいの中で集い過ごす方法は、家族の構成や年齢によって様々です。かつての日本の住まいにみられた「畳」「板の間」「土間」「囲炉裏」などは、現代にも取り入れることができ、家族の集いをいざなうでしょう。

「畳」は弾力性や保温性を備え、空気の調湿作用をもっています。畳の間は、乳幼児を安心して休ませることができ、年齢を問わずリラックスできて寛げる場にもなり、また、ダイニングやキッチンに近い場所に設けると、家族が集うスペースの中心ともなります。

「板の間」は木の柔らかな触感や温かみが感じられ、椅子座だけでなく床座の生活にも利用できます。小さな子どもの遊びにも適しますので、子どもを中心にした家族の集

いをうながします。

「土間」は趣味を楽しめる以外に、戸外に面する開放的で気持ちのよいしつらえにして、第二のダイニングや子どもの遊びに利用することも考えられます。

「囲炉裏」は採暖や調理に使われ、かつては家族がその周りを囲んで団らんする生活が行われていました。今日、囲炉裏が設けられることは少なくなりましたが、火のある場を住まいの中心とする考え方は大切にされ、薪ストーブなどの普及が進み、集いの場を演出しています。

このように空間構成にマッチした床の素材や暖房機器の採用などにより、家族が集う場に相応しい空間づくりにつながるものと考えられます。



温かみのある無垢材の板の間と畳の間。子どもの遊び、お年寄りの寛ぎなど、様々な使える (写真:①)



食卓に炉を設けている。家族が火を囲み食事をを楽しむことを重視している (写真:①)



玄関から続く土間スペース。家族が集まり、遊びや趣味などを楽しむ (写真:①)



小上がりの畳の間をダイニング・キッチンの近くに配置。子どもを休ませたり、家族がくつろぎやすい (写真:①)

集いをうながす

① 続き間 縁側
土間 濡れ縁

住まいでの人と人の交流には、子育てや趣味、地域のボランティア活動などを通じて知り合った友人や仲間、学生時代から付き合いの続く友人、職場の同僚などとの交流があります。最近ではホームパーティやガーデンパーティなど、住まいの身近なところで、家族以外の人々と集う機会が増えてきました。

住まいのなかに人が集いやすい場を形成するためには、ゆとりがあり融通性の高いスペースや自然を感じられる心地よいスペースが有効です。「続き間」(広間)は間仕切りを上手く使い、大人数から小人数の集まりまで色々な目的に柔軟に対応できます。かつての日本の住まいには、この

続き間と戸外(庭)のあいだに、板敷きの「縁側」が設けられていました。「縁側」は通路以外に広間の補助的なスペースとして使えるとともに、戸外の自然環境をうまく引き込んで心地よい室内環境をつくりだします。

また、創作やアウトドアなどの趣味の活動を家族以外の人々が参加して一緒に実践できる場として、室内と戸外とのあいだに「土間」を、また、戸外に「濡れ縁」(デッキ)などを設けることも有効です。これらの境界部分の建具を全開放できるようにする、床の素材を工夫することなどにより、活動の楽しさは膨らみ、新たな展開にもつながることでしょう。



板の間と畳の間の続き間はホームパーティや趣味など多用途に利用できる (写真: ①)



部屋と庭のあいだの土間スペースは、人と人との集いの中心の場となる (写真: ①)



屋外のウッドデッキで、友人らとともに、自然を感じながら食事を楽しむ (写真: ①)



集合住宅の共用庭にテーブルなどが置かれ、入居者同士が集まったり、家族が使える場を形成している (写真: ③)



庭に面する明るい縁側状の広間で、友人家族を迎えて、子どもと大人が食事をともに楽しむ (写真: ①)

人を迎え入れ集う

来訪者を気持ちよく迎え入れる

☞ 植栽 前庭
玄関 格子
建物配置

住まいはその場所に存在している間、様々な人が訪れ、その前を往き来します。住まいを訪れる人が気持ちよさを感じたり、その前を往来する人が落ち着きや安心を感じられるよう、住まいの外観や玄関構え、門塀、垣、庭などのつくり配慮することが大切です。

通りに面する花木や生垣などの「植栽」は、道を行く人の目を楽しませてくれます。開放的で、すこしゆとりのある「前庭」は、近隣の方とおしゃべりの場ともなります。「玄関」は日本の伝統的な習慣である履き替えの場ですが、ここを明るく、ゆとりのある空間とすることで、訪れる人に心地良さを感じさせます。玄関から続くホールに「地窓」

を設けて庭の緑が望めるようにする工夫なども、自然の潤いを感じさせる効果があります。

かつての都市の住まいでは、通りに面して「格子」が設けられていましたが、これは風を通しつつ外部からの視線を制御してプライバシーを確保する工夫です。同時に直線で構成される美しく細やかな意匠は、通りから見て閉鎖的な印象を感じさせません。格子は祭りのときなどには外されて、内が外に開放される使い方もされたようです。閉じて断つ、開いて入れる機能を使い分けるその方法は、身近な他者に配慮しながら暮らす上での知恵の現れと言えるでしょう。



落ち着いたゆとりのある玄関ポーチ、玄関の正面は地窓を通して庭の緑を感じられる（写真：①）



通りから建物までに引きをとり、緑の庭木のあるアプローチをしつらえ、来訪者をお迎える（写真：①）



京町屋の通りに面した格子は視線の制御と内外のつながりを両立、祭りのときは取り外される



玄関の土間部分にちょっと腰掛でき、来訪者とおしゃべりできる（写真：④）

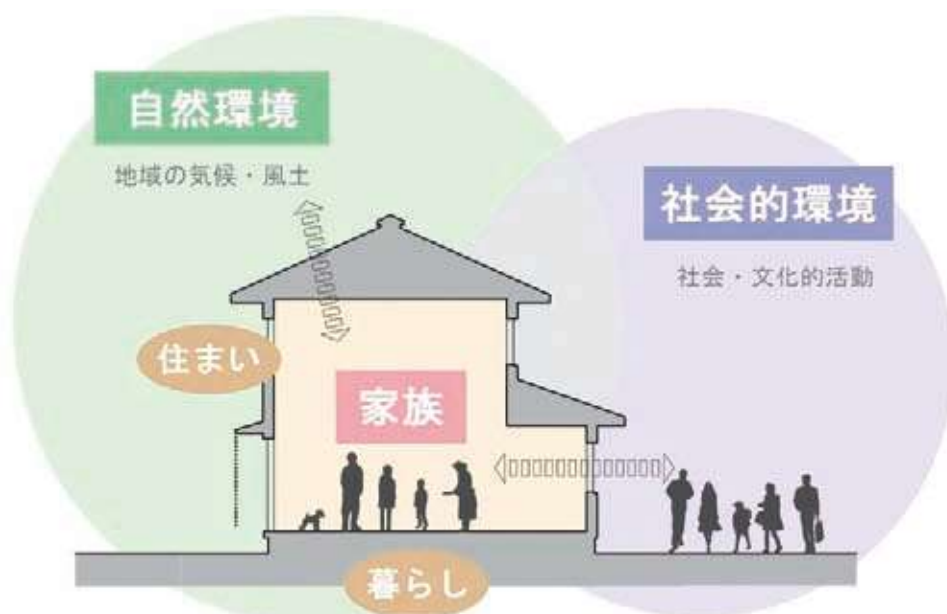
住まいづくりの目的チェックシート

	住まいづくりの目的	効果
人と人との 関係を守り 育てる	人を迎え入れ集う ☐ 来訪者を気持ちよく迎える ☐ 集いをうながす	暮らしは「社会」のなかで営まれ、人と人の中で成立しています。住まいに交流の場を設けること、人との関わりに配慮したしつらえを施すことは、社会的な生活を育み、住生活のみならずそれをとりまく地域社会を豊かにしていくことにつながります。
	家族が見守り合い、成長する ☐ 家族の集いをうながす ☐ 家族の気配や様子を感じる	「家族」の生活や成長の器としての住まいのつくりは、家族相互の関わりに少なからず影響を及ぼします。家族がお互いに心を配り、尊重し合う関係の形成に寄与するような住空間や各部のつくりが大切となります。
日々の暮らしを 楽しむ	暮らしのなかで、楽しみや豊かさを味わう ☐ 和の意匠を味わう ☐ 趣味を実践し楽しむ ☐ 思い出を受け入れ、心を落ち着かせる	住まいは食事、就寝など基本的な生活行為の場であると同時に、「社会」の中で形成されてきた文化的な様々な行為や活動を楽しめる場でもあります。そのような場を住まいのなかに形成することは、日々の暮らしに豊かさ、深み、緊張感などを与えます。
	自然の変化やその風合いを感じとる ☐ 自然の素材を味わい、継承する ☐ 四季の変化を感じ、楽しむ ☐ 光を採り入れる、制御する	「自然」とのふれ合いは、私たちの気持ちに落ち着きや潤いを与えてくれます。住まいのなかに、自然を感じられる空間を形成する、自然の素材を活用してその変化や風合いを楽しめることは、日々の暮らしに一層の彩りを添えてくれます。
心地よく 環境にやさしい 生活を支える	夏の快適、涼やかな生活に寄与する ☐ 自然の風を取り込み涼感を得る ☐ 日射を遮り室内への流入を抑える	夏期の高湿・多湿な気候に対して、日射の遮蔽や自然風の活用による採涼は、従来から住まいに工夫して用いられてきました。夏期や中間期の「自然」を制御し活用することは、生活時の省エネルギーにも寄与します。
	冬の快適、あたたかな生活に寄与する ☐ 熱移動を調節し寒さを緩和する ☐ 日射熱を集め蓄えて暖かくする	冬期の低温な気候に対して、日射熱の活用や熱の調節による採暖は、夏の対策ほど意識されてこなかったものの、かつての住まいのなかに効果が得られる要素もあります。それらを工夫して用い、冬期の「自然」を制御することは、暖房エネルギー消費の削減にも寄与します。
外的環境から 建物を保護する	家をいためる自然の力を和らげる ☐ 風雨から建物を守る ☐ 湿気から建物を守る	強い雨風、大雪、高い湿度といった「自然」の環境要素は、それが長期間にわたり過度に建物に作用すると、建物を傷める要因となるおそれがあります。各部のつくりや材料の使用法に工夫をこらし、地域の気候風土のなかで長寿命な住宅とすることが大切です。

次のページから、「住まいづくりの目的」を達成するための建築的な対応方法や考え方について、事例を交えて紹介します。

住まいづくりの目的と対応のしかた

日本の住まいと住まい方は、古来より、地域の自然環境に呼応し、かつ、社会的環境や家族関係の変化の中で形成され、受け継がれ、発展してきました。この自然環境、社会的環境、家族関係のなかでつくられ、継承されてきた日本の住まいとそこでの暮らしを再確認することを通じて、現在における住まいづくりの参考になる考え方や設計手法などを見出すことができます。



昔も今もかわらないー住まいと暮らしをとりまく自然／社会／家族

これから住宅を取得（建設または購入）することをお考えの一般のユーザーの方は、どのような住まいにすることを望んでいるでしょうか。ユーザーの方の中には、次の住まいや暮らしのイメージがつかずに、迷っている方も多くいるのではないのでしょうか。この手引きでは、住まいづくりの目標像となるようなテーマを整理し、「住まいづくりの目的」として掲げています。自然環境、社会的環境、家族関係のなかで築かれ、使われてきた日本の住まいのありようから、現在における「住まいづくりの目的」を次のとおり4つ設定しました。

住まいづくりの目的

人と人との関係を守り育てる

日々の暮らしを楽しむ

心地よく環境にやさしい生活を支える

外的環境から建物を保護する

この「住まいづくりの目的」は、ユーザーの方が住まいづくりで大切にしたいことを考える際の指針になるものと考えています。右のページにそれぞれの具体的内容と効果をチェックシートに示しますので、大切にしたいと思うテーマがあるかどうかチェックしてみてください。

目次

2 住まいづくりの目的と対応のしかた

人と人との関係を守り育てる

- 4 人を迎え入れ集う
- 6 家族が見守り合い、成長する

日々の暮らしを楽しむ

- 8 暮らしのなかで、楽しみや豊かさを味わう
- 10 自然の変化やその風合いを感じとる

心地よく環境にやさしい生活を支える

- 12 夏の快適、涼やかな生活に寄与する
- 14 冬の快適、あたたかな生活に寄与する

外的環境から建物を保護する

- 16 家をいためる自然の力を和らげる

18 日本の住まいの要素

- 19 屋根・軒 … 勾配屋根 瓦屋根 越屋根 深い軒
- 20 外壁 …… 板壁 漆喰壁
- 20 開口部 …… 高窓・天窗 地窓
- 21 掃き出し窓 窓庇 日除け 格子
- 22 雨戸
- 22 内部建具 … 襖 引戸 障子
- 23 欄間
- 23 内部空間 … 続き間 縁側 玄関
- 24 吹抜け
- 24 ゆか …… 畳(和室) 板の間 土間
- 25 内部意匠 … 真壁 大黒柱
- 25 装い …… 床の間 仏壇・神棚
- 26 囲炉裏
- 26 素材 …… 土壁 自然素材・地域産材
- 26 戸外 …… 濡れ縁
- 27 坪庭・中庭 植栽 前庭
- 27 配置 …… 建物配置

●本編に掲載の写真・画像の出典および提供者（各写真・画像に番号を記載）

- | | |
|---------------------|-----------------|
| ① 季刊「チルチンびと」（風土社） | ⑥ 阿部利広／阿部建築研究室 |
| ② 積水ハウス | ⑦ 古川保／古川設計室 |
| ③ 野村不動産 | ⑧ 柴田裕弘／G A開発研究所 |
| ④ ミサワホーム | ⑨ YKK AP |
| ⑤ 片山和俊（設計）・木寺安彦（写真） | ⑩ 一般社団法人日本襖振興会 |

記載なき写真・画像はアルセッド建築研究所が提供。本編の記事、写真、図版等の無断転載を禁じます。

「今に生きる日本の住まいの知恵」について

日本の住まいは、木の柱、土台、はりなどを骨組として、土を用いた壁に塗り仕上げを施し、茅・木板や樹皮・瓦などで屋根を葺く工法により、古来よりつくられてきました。地域で産出され、生産された自然の材料をふんだんに取り入れ、代々受け継がれてきた地域の生産技術が生かされてきました。

外観をみると、屋根は勾配がつけられ、軒は深く出ています。日本は雨の多い国であり、雨水が建物内に浸入すると建物を早く傷めるおそれがあることから、雨への対策はとても重要です。勾配屋根は降雨をいち早く建物の外に追いやる工夫ですし、深い軒は外壁に降雨を当たりにくくする機能をもちます。軒は夏期に強い日射を遮る効果もあります。また、柱、はりのフレームのあいだには大きな窓が取り付けられています。窓には室内に外部の風を取り入れ、太陽の明るい光を導き入れる効果があります。こうした地域の気候の影響を制御し、上手く利用しようとする環境親和型の技術は、現代の住まいにも用いることができ、電力をはじめとするエネルギー需要の抑制が課題となっている今日、一層再評価されるべきものと考えられます。

室内は、畳敷きの和室、戸外とのあいだの縁側、三和土^{たたき}の土間、木板を張った板の間があり、それぞれに機能がありました。和室は来客を迎え入れる座敷、家族の集う茶の間など、土間は日常の炊事のための場、農機具や漁具を手入れする作業場などとして使われていました。こうした住まいの複合された機能は、当時の社会や生産体制を背景に必要とされたものであり、現代そのまま必要とされるものではありません。しかし、住まいのなかで営まれた様々な生活シーンは、日常の暮らしに豊かさや奥深さを与えていた面もあると想像され、現代の住まいに多面性を付加することは有用な面もあると考えられます。



勾配屋根・瓦屋根（富山）



深い軒・縁側・すだれ・掃き出し窓（熊本）



和室・続き間・襖・障子（山形）

かつての日本には、このように地域で循環する住まい、長持ちする住まい、心地よく過ごせる住まい、多様な暮らしを許容できる住まいを実現するために、工夫が施された様々な要素が取り入れられていました。この「和の住まいのすすめ ～今に生きる日本の住まいの知恵～」は、それらの手法・技法や営まれていた住まい方を再確認し、現代における住まいづくりの参考になる考え方や技術的な内容を紹介します。

本編は、これから住宅の新築、購入や改修を行おうとする一般のユーザーの方の参考書として、工務店や住宅メーカー、素材生産者などの住まいづくりに携わる事業者がユーザーの方と情報を共有するツールとして、利用していただくことを想定しています。そのため、伝統に根ざした住まいづくりの手法・技法や住まい方の実例を交えて、住まいづくりの考え方や住まいを構成する要素をまとめています。実例は、様々な地域の住まい、伝統的な住まいと現代の住まい、現代の集合住宅などから、幅広く取り上げています。

これから住まいづくりを考える方に広く活用されることを願っています。

和の住まいのすすめ

発行 和の住まい推進関係省庁連絡会議
平成 25 年 10 月
印刷 加藤文明社

「今に生きる日本の住まいの知恵」編
編集協力 アルセッド建築研究所

「日本の住まいの知恵に関する検討調査委員会」（委員長：小林秀樹千葉大学
大学院教授、事務局：公益財団法人日本住宅総合センター）における検討内
容を基にとりまとめたものです。

和の 住まいの すすめ

— 今に生きる日本の住まいの知恵